

鳥取藩池田家における家老墓の様相

池 上 悟

一 鳥取藩池田家の成立

江戸時代に日本海に面する山陰地方中央部の因幡、伯耆の二国三十二万石を領した鳥取池田家は、寛永九（一六三二）年に備前岡山から移封した池田光仲を初代とする。光仲は、池田輝政と徳川家康の娘である督姫との間に生まれた忠雄の長男であり、徳島藩主の蜂須賀至鎮の娘、三保姫を母として寛永七（一六三〇）年に江戸藩邸で生まれた。

池田輝政は、永禄七（一五六四）年に織田信長の重臣である池田恒興の次男として、荒尾善次の娘を母として生まれ、長じて信長の近習となった。信長没後は羽柴秀吉に属し、天正八（一五八〇）年には恒興は大垣城主、輝政は池尻城主となった。天正十二（一五八四）年の羽柴秀吉と織田信雄・徳川家康との間でおこった小牧・長久手の戦いで池田恒興と長男の之助が討ち死にした後に輝政が家督を相続して、美濃大垣十三万石を領有した。天正十八（一五九〇）年の小田原征伐後には戦功によって十五万二千石に増加されて三河吉田城主になった。関ヶ原の戦いには東軍に属し、戦功によって播磨姫路五十二万石に増加移封された。

慶長八（一六〇三）年には輝政の幼い次男忠継に備前岡山二十八万石が与えられ、兄の利隆が後見した。また慶長十五（一六一〇）年には、三男の忠雄が淡路洲本六万石を与えられた。輝政が慶長十八（一六一三）年に没すると長男の利隆が家督を継ぎ、姫路五十二万石のうち西播磨十万石を忠継に分与した。この結果、輝政長男の利隆の播磨姫路藩は四十二万石、二男忠継の備前岡山藩は三十八万石を領有することになった。

利隆は元和二（一六一六）年に歿し、姫路藩四十二万石の家督を長男の光政が継いだ。幼少であることを以て、翌年鳥取藩三十二万石に転封せられた。

慶長二十（一六一五）年に岡山藩主忠継が没した後は、家康の娘である督姫を母とする同母弟の輝政三男忠雄が淡路洲本から移って岡山藩主となった。この時に忠継遺領のうち播磨宍粟郡三万八千石は同母弟の四男輝澄に与えられ山崎藩主となった。同じく赤穂郡三万五千石は、同母弟の五男政綱に与えられ赤穂藩主、同母弟の六男輝興には播磨佐用郡二万五千石が与えられ平福藩主となった。これらの結果、岡山藩は三十一万二千五百石となり、寛永八（一六三一）年に赤穂藩主政綱が没した後は、輝興が一万石加増されて赤穂藩を継いだ。

寛永九（一六三二）年に岡山藩主の忠雄が没すると、三歳の光仲が家督を継ぐこととなったが、幼少のため山陽道の要所である岡山は治め難いとされ、因幡・伯耆三十二万石を領していた従兄弟の光政と「御国替」となった。この後、光政系の岡山藩、光仲系の鳥取藩は転封することなく、廃藩置県まで継続した。⁽¹⁾

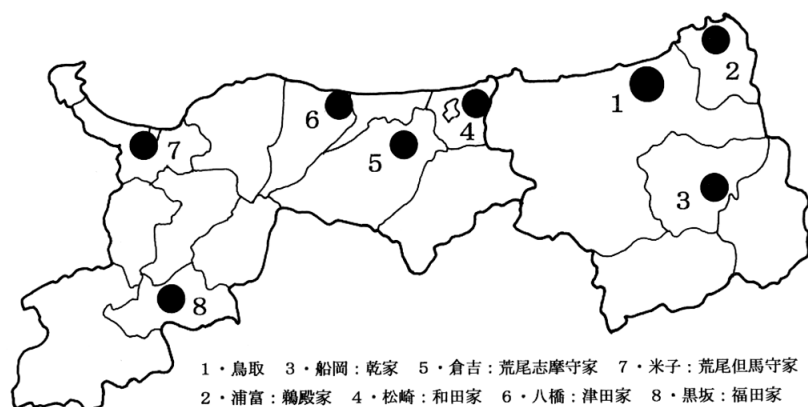
池田光政が入封する前、関ヶ原の戦いの後に池田恒興の三男の長吉が六万石で入封して鳥取藩を立藩した。慶長十九（一六一四）年に長吉が歿すると長男の長幸が家督を継ぎ、元和三（一六一七）年に備中高松藩六万五千石に移封され、この後に姫路から池田光政が三十二万石で転封した。

光政入封以前の因幡・伯耆二国には、因幡鹿野藩三万八千石・亀井氏、伯耆倉吉藩三万石・里見氏、伯耆矢橋藩二万三千石・市橋氏、伯耆米子藩六万石・加藤氏、伯耆黒坂藩五万石・関氏などの小藩が分立していたが、光政入封で大藩経営が定まった。

二 鳥取藩池田家の家老

大名家としての池田家の家臣団は、分家創設に伴って分属していった。各藩主家の歴代嗣子以外は家臣に組み込まれており、岡山池田家、鳥取池田家ともに一門の家老が存在している。岡山池田家では、片桐池田家、森寺池田家、天城池田家が領内の要地で一〇三万石を領有して、家老家の半数を占めている。⁽²⁾このほか五千石を領し中老をつとめた武憲流池田家なども存立した。⁽³⁾鳥取池田家では、遅れて一門四家が執政に登用されている。

池田家は播磨姫路五十二万石藩主の輝政の没後に、その遺領を長男利隆が姫路藩、二男忠継が岡山藩三十八万石、三男忠雄が洲本藩を分割して受け継ぎ、忠継没後には忠雄が岡山藩を継いだ。この過程で池田家臣団は分割・統合されて、岡山藩、鳥取藩の家



第1図 因伯兩國の家老墓所在地

臣団が形成されていった。両藩の家老は、本来の家老の多くは岡山藩に留まり、鳥取藩へは荒尾家のみが付属しており、鳥取藩の家老へは番頭家が格上げされて付置されている。池田家門もまた、輝政兄弟および利隆兄弟で家臣に組込まれた本家は岡山藩に留まり、この分家が鳥取藩の家老となっている。⁽⁴⁾

「御国替」当時の鳥取藩の家老は四人である。幕府によって、子弟を人質として江戸藩邸に置くことを義務づけられた「証人上」の家は十一家あり、家老四家はこのうちに含まれる。

また職制上は、「家中最高の格式を着座とす。家老職の補任は、此格式の者に限らる。軍制上には、旗頭として一隊の将となり、陣代をも勤むる定めなり。享保六年より、文久元年に至る百四十年間、着座の家筋は十家にして、家老職は此家筋に限らるるを以て、普通之を御十家、又は十家老とも唱ふ。」とされ、「書院に着座し、賜杯の榮を有する家筋に、着座の名称を附することとなりし」が、名称の由来とされる。

享保十七年の組帳に記載された十家は、荒尾但馬・一万五千石、荒尾志摩・一万千石、和田遠江・五千五百石、津田周防・七千石、鶴殿民部・五千石、乾上総・四千五百石、池田大和・二千二百石、荒尾和泉・二千三百石、池田豊後・三千石、荒尾筑後・二千三百石である。

鳥取池田家中では、着座に次いで番頭が位置づけられている。士を十組に分かちて番頭が各組を預かる。番頭中の筆頭四家は証人上に含まれ、福田、菅、安養寺、矢野家が相当する。

またこれら重臣のうちには、戦国期の城下町を預かって町制を任された「自分手政治」を認められた家もある。米子の荒尾但馬守家、倉吉の荒尾志摩守家、八橋の津田家、松崎の和田家、浦富の鶴殿家、船岡の乾家および黒坂の福田家である。寛永十五

(一六三八)年の石高は、荒尾但馬守家・一万三千石、荒尾志摩守家・八千石、津田家・七千石、和田家・四千六百石、鵜殿家・五千石、乾家・三千五百石、福田家・三千五百石である。⁽⁵⁾

「御国替」当時の鳥取藩の家老は、荒尾内匠成利、荒尾志摩高就、和田飛騨三正、乾兵部直幾の四人である。

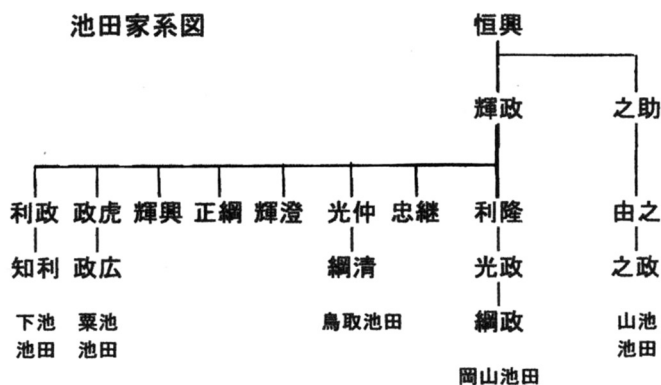
荒尾家の祖先は尾張国知多郡荒尾谷の土豪であり、荒尾空善は織田信長に仕え今川義元との戦いで戦死し、男子無きをもって同族の善次に其女を配して嗣子とした。今川氏との戦いで長子善久は戦死し、善次は池田恒興に仕えて娘を嫁がせている。従って荒尾成利と嵩就は、池田輝政の従兄弟となる姻戚である。善次の次男成房は池田恒興に仕え、輝政の姫路移封時には龍野城主として1万石を与えられている。輝政次男忠継の岡山入封時には家老職となり、忠継没後には忠雄の家老となっている。成房隠居後に長男成利は家老職に補されている。荒尾嵩就は成房の次男であり、善次の三男隆重の養子となって、忠継の岡山入封時に兄とともに家老に補された。

和田氏は、六孫王経基の子満正の子孫と伝え、近江国甲賀郡和田谷に居して氏名とした。天正年間に信維が織田信長に仕えた後に池田恒興に寄り、二男の正信は輝政に仕えて姫路を経て岡山移封時に家老職となっている。二代和田三正は荒尾成房の三男であり、正信没後に養子として家督を継いだ。すなわち荒尾成利、嵩就、和田三正は三兄弟である。

乾氏は宇田源氏であり室町幕府に仕えた後、長次の代に池田恒興に属し、姉川の戦い、小田原征伐、関ヶ原の戦いなどの戦功によって、忠雄洲本に封ぜられるにあたって傳となり千四百石を賜わり家老職をつとめ、岡山移封後にも家老に任じられた。子の直幾は父の没後に家老職を引き継ぎ、三千五百石を給された。

鵜殿氏は池田譜代の家臣ではなく、池田輝政の継室となった徳川家康の次女督姫の縁戚であり、督姫の求めによって幕府から派遣された鵜殿長次を初代とする。督姫の母は鵜殿長忠の娘(西郡局)であり、督姫は輝政との間に五男二女をもうけた。慶長十八(一六一三)年に輝政が歿した後に、督姫(良正院)の要請により叔父鵜殿長次が輝政次男忠継を輔翼するために岡山に赴き五千石を賜わった。光仲因幡へ転封後の寛永十(一六三三)年に引退し、寛永十三年に八十四歳で没した。長次には五人の男子があり、長男長堯、次男長道、三男長正は幕臣として残り、四男長之と五男長義が池田家臣となり、長之が跡を襲った。⁽⁶⁾

「御国替」以降に家老は補充され、寛永年中には但馬守・志摩守の両荒尾家の嫡子が家老に就任している。さらに元禄五(一六九二)



第2表 池田家系図

年には、両荒尾家の分家が千石で創出されて家老に就任するようになった。

また池田家家門の下池田家の池田大蔵には千八百石、山池田家の池田日向と栗池田家の池田図書には千百石が与えられ、着座の資格を与えられ、家老に登用されるようになった。家門のうちでは寛永十八年に池田政広、寛永十九年に池田知利、正保元年に池田之政が鳥取藩に召し出されている。

栗池田家初代の池田図書政広の召出しについては家譜に「先祖池田図書儀は池田加賀守四男、母は若原勘解由娘、則六男二女有之。長男掃部二男左近は加賀守在世之内相果、次二女子二人内一人は忠雄様御趣意御座候而福田兵庫二嫁し、一人は相果、其後寛永十二乙亥年七月廿八日、加賀守病死、此時遣子幼若罷在候得は、新太郎様より三男佐渡え遺領相続被仰付、兼而又兄弟内一人御当家構え召仕被為下候様加賀守内願之趣有之二付、四男図書儀差越二相成」と示されている。

すなわち池田政広は、岡山池田家臣となった輝政の七男政虎の四男と確認できる。召出し後、政広は江戸に於いて不都合あり、家禄没収され蟄居を命じられた。しかし政広の室は荒尾嵩就の女であり、政広の姉は福田和泉の内室という格別の親族であることを以て、福田和泉の子が養子となって五百石を賜り家は存続した。この家系は、政広が着座の席を離れたあとの二百年後の文久年間の政挙に至って着座に復

山池田家は池田之政に始まる。之政は池田恒興の長男之助の家系であり、之助の子の由之は三万二千石を領した岡山藩家老天城池田家の初代となった。之政は由之の四男であり、由之の知行地であった伯耆国米子城で生まれている。

下池田家は、岡山藩家老となった輝政の九男利政の子の知利により創始された。知利は父利政の知行地であった伯耆国汗入郡逢坂の地で生まれている。

家老家は、鳥取城下に占める屋敷地も大手に優先された。着座十家のうち、米子・倉吉・松崎・八橋・浦留・船岡に陣屋を設けて

町政を行った「上六家」の屋敷地は、城郭に近い内堀に面する大手前に配置され、山池池田・下池池田・米子荒尾分家・倉吉荒尾分家の「下四家」にはその外側の地域が⁽⁸⁾あてられている。

三 鳥取藩池田家家老墓の様相

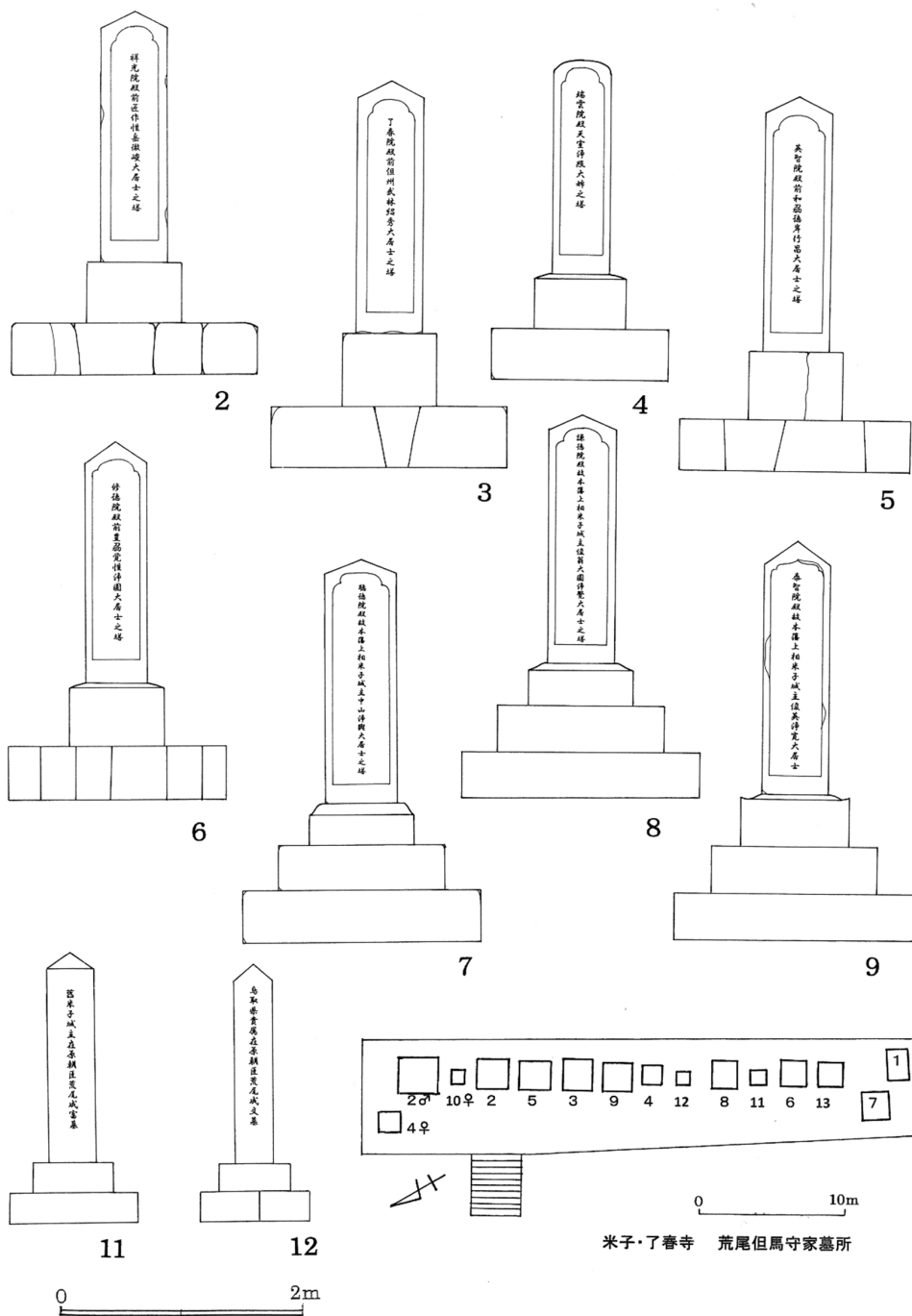
(1) 【荒尾但馬守家墓所】

伯耆西端の要地である米子城を預かった荒尾但馬守家の墓所は、米子城下の東、勝田神社と旧制米子中学校校地に隣接する黄檗宗・了春寺の本堂背後の山裾に造営されている。西側に階段を付設した奥行四間、幅廿間ほどの敷地に、横一列を基本として15基の墓石が配置されている。米子市史跡に指定されて、整備保存が図られている。墓域と階段の位置から想定すると、階段正面に二代成直の墓石(2)、この左側に二代内室の墓石を配置しており、二代墓石を起点として右側に展開し、次期には既存の墓石の中間に新規の墓石を配置したことが復元できる。

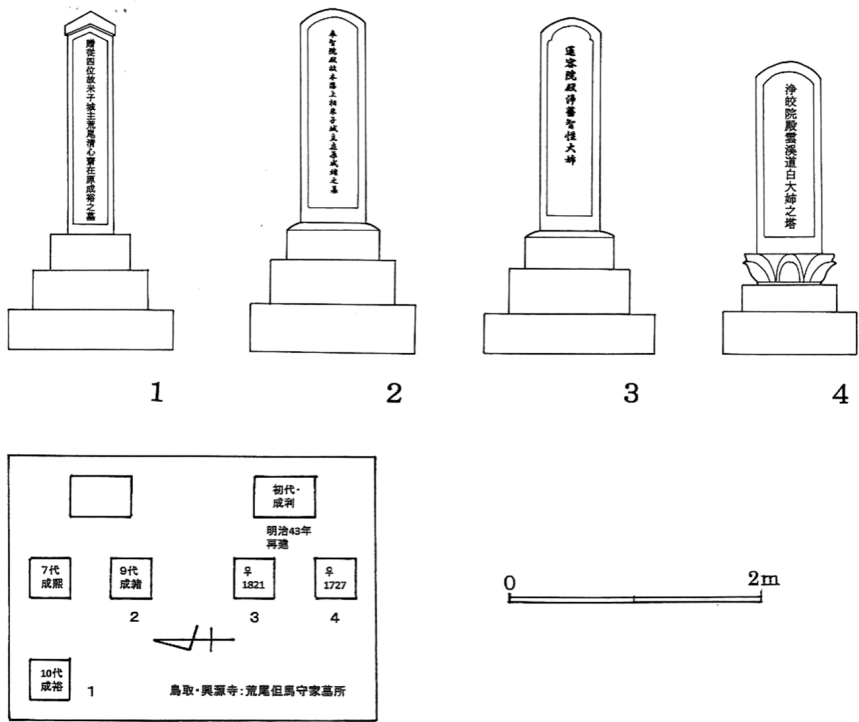
この墓域の北側下段には、旧家臣墓と思える墓域も造営されている。石材が軟質砂岩であり遺存状態は劣悪であるが、数家の存在を確認することができる。歴代当主の墓石は安山岩を使用しており、基本型式は柱状墓石の頂部を尖らせた尖頂方柱型式であり、江戸期の因幡伯耆両国の支配者階層では他に類例を欠くものである。内室墓として唯一確認できる四代内室の墓石は、頂部を円く仕上げた円頂方柱型式であり、立場の違いを意識した墓石型式の採用と確認できる。

墓石本体は幅52〜60厘、(一尺七寸〜二尺)、高さ206〜216厘(六尺八寸〜七尺一寸)規模である。現状は基礎二〜三段の上に墓石を建てるものであるが、これは近年再整備された結果であり、最も整備された墓石は最上段の上面の幅を狭めた三段の基礎を伴っていたと思われる。歴代当主の墓碑銘は「○○院殿○○大居士」を基本とし、六代以前にはその間に受領名を加え、七代以降は「故本藩上相米子城主」を加えている。

荒尾但馬守家の鳥取における墓地は、藩主池田家と同じく黄檗宗・興禅寺に営まれている。墓地は本堂裏山の南向きの斜面を造成して造営されており、5×8米規模の敷地中に6基の墓石が建立されている。横に並列して七代成熙と九代成緒、右側に大姉号の2基の墓石を配置している。文政四(一八二二)年、弘化三(一八四六)年の紀年銘から判断すると、それぞれの内室墓と想定できる。



第2図 荒尾但馬守家墓石(1)・米子了春寺



第3図 荒尾但馬守家墓石（2）・鳥取興福寺

手前には、米子・丁春寺例と同様の尖頂方柱型式の十代成裕の墓石を配置しており、「贈従四位故米子城主荒尾清心齋在原成裕之墓」「贈位明治四十年五月二十七日」とする。

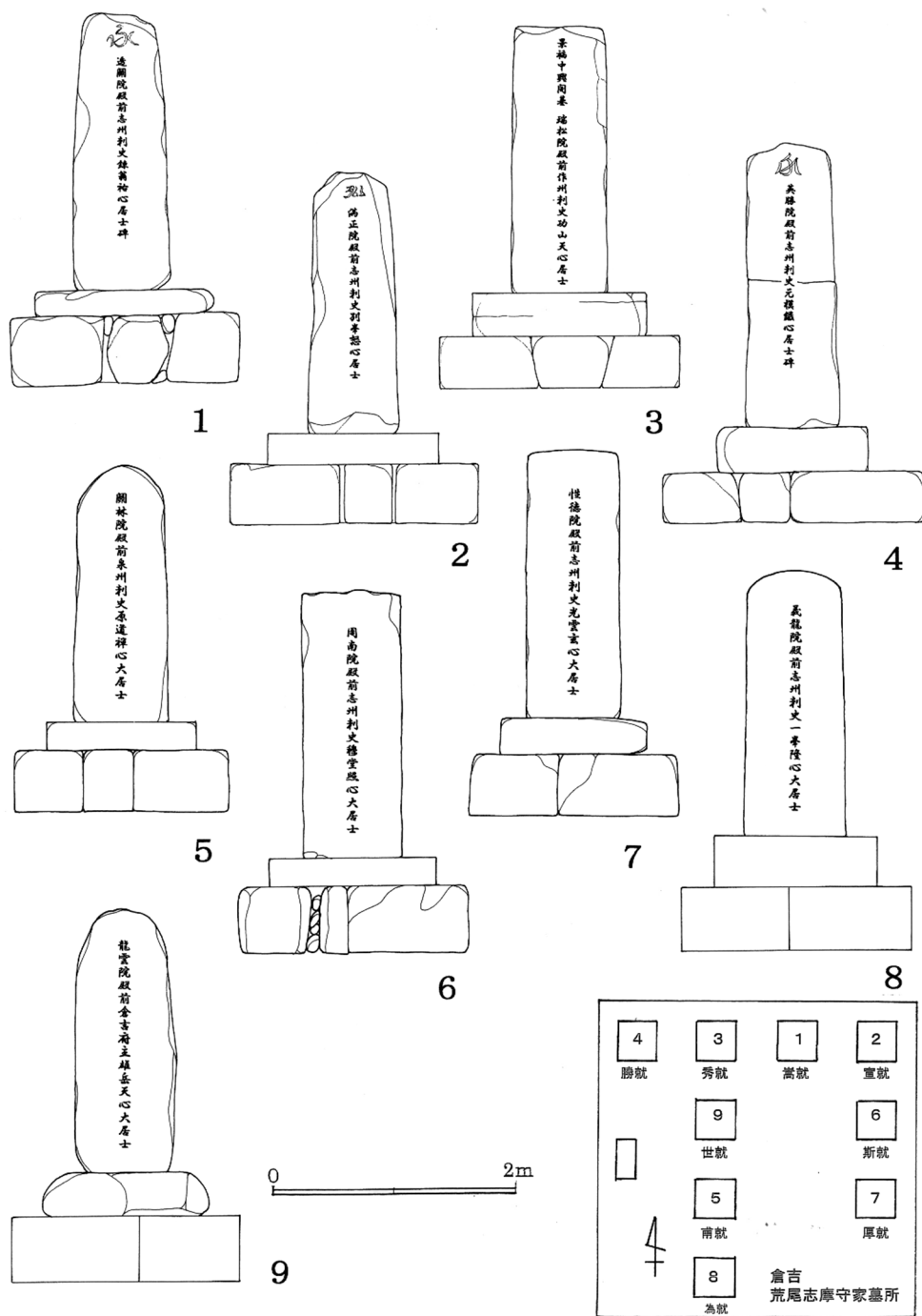
奥の右側に明治四十三年に再建された初代成利の墓、左側に歴代米子城主の供養塔を配置している。供養塔に紀年銘は明記されていないものの、同じく板石の使用からほぼ同時期の建立と考える。

（2）【荒尾志摩守家墓所】

伯耆国のかつての国府所在地である倉吉の地は、南総里見氏の配流の後、荒尾志摩守家が預かった。荒尾志摩守家の墓所は、倉吉・曹洞宗満正寺の管理する丘陵上の在地墓所と、鳥取の曹洞宗・景德寺に造営された。満正寺は、元禄十二（一六九九）年に荒尾志摩守家の菩提寺として建立されたものである。

鳥取景福寺は、慶長年間に荒尾隆重が姫路城下に移転し、荒尾家の移動に従って岡山城下、次いで鳥取城下に移った。岡山城下には、同宗の景福寺も小規模に所在している。

倉吉の在地墓所は、10米四方ほどの敷地に初代～九代までの歴代当主墓が配置されている。これらの墓石は、



第4図 荒尾志摩守家墓石(1)・倉吉満正寺

二段の基礎の上に造立された、幅76～84榿、高さ220～234榿、厚さ20榿ほどの、側面を整形した安山岩を主体とする板石を使用した特徴的なものとなっている。

三・六・七・八代の墓石は側縁が直線状に整えられており。特に七・八代の墓石は、頂部が円く仕上げられている。

この歴代墓所は、昭和五十八年の鳥取県中部地方を震源とする地震により多くが倒壊した後に整備され、倉吉市史跡に指定されて整備・保存が図られてきた。現状は、平成二十八年の鳥取中部地震により9基中の4基が倒壊して未整備のままとなっている。ここに図示した図面は、倒壊以前を基本として、一部倒壊後に図化したものである。

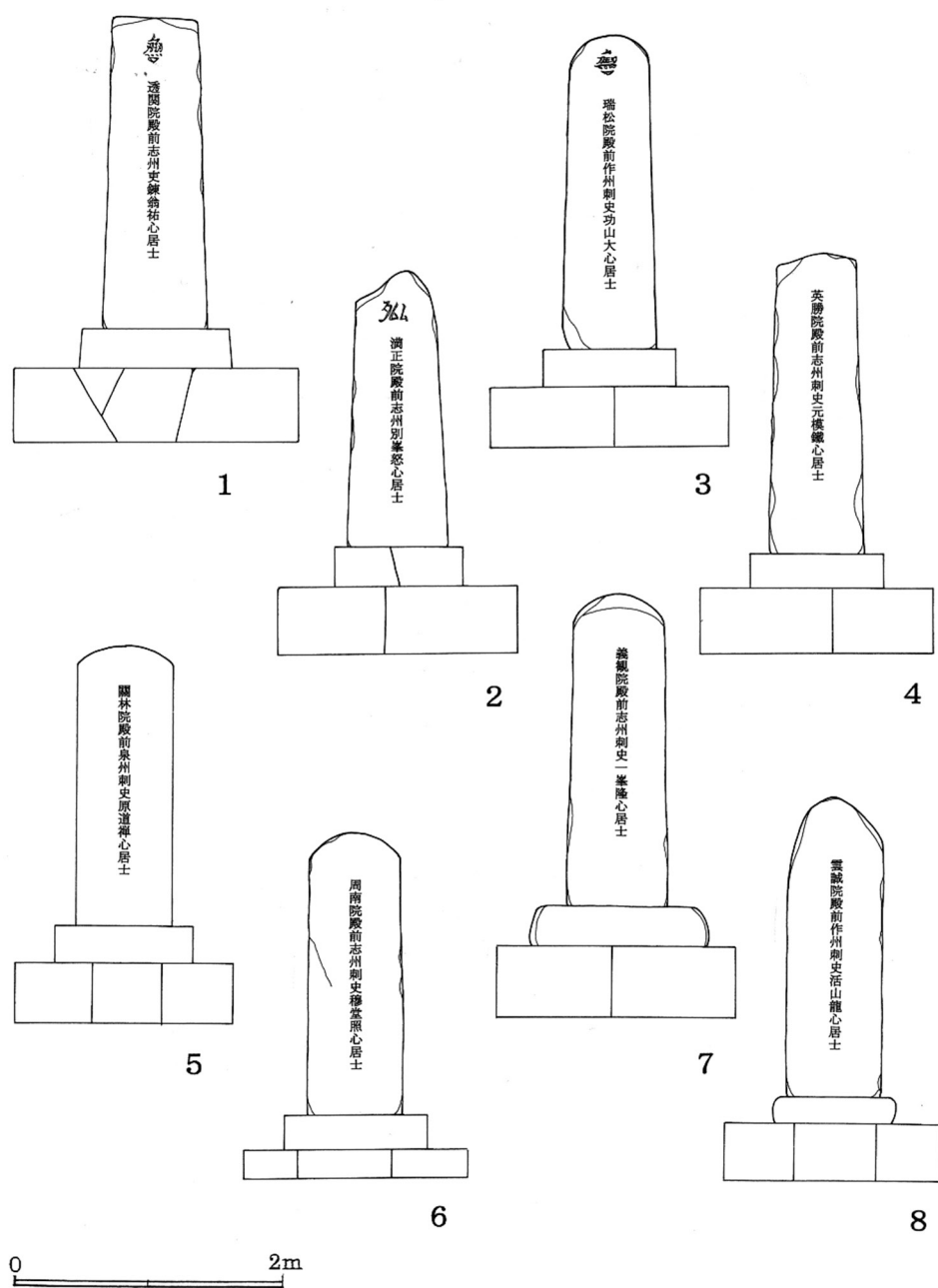
初代嵩就の墓石(1)は、平成二十八年の地震で倒壊したままとなっている。本体下端に造作された柄は径20榿ほどの円形を呈するものであり、基礎に穿たれた柄穴も円形である。地震による本体の振動により、柄穴を起点として基礎は半折している。墓碑銘は「透閑院殿前志州刺史鍊翁祐心居士碑」とするものであり、「○○院殿+受領+法名」の記載法は以後の基本となっている。墓石表面の頭部には卍を崩した頭書を刻んでおり、同様の頭書は四代勝就の墓石(4)にも認められる。この種の頭書を刻んだ墓石は、広く伯耆各地の江戸期前半の曹洞宗寺院墓地に確認できる。

二代宣就の墓石(2)も地震により倒壊しており、本体正面は下半部が剥離して脱落している。地震による倒壊例のうち本体表面が剥離したのはこの墓石のみであり、軟質の凝灰岩の石材が一つの要因として考えられよう。法名「満正院殿前志州刺史別峯怒心居士」のうち、「峯怒心居士」が剥落している。

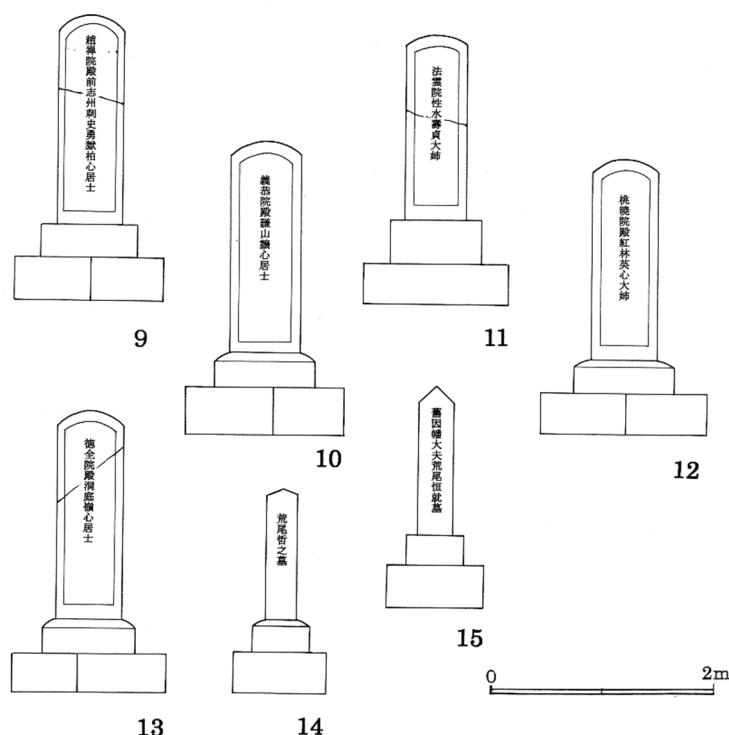
二代宣就の墓石には「廬」の頭書が刻まれているが、これは頭書の「鳥八白」の意義が問題となっており、意識されてきているが未だその意義は明確にはなっていない。「鳥八白」と同じく浄土往生を希求したものと思える。¹⁰⁾

三代秀就の墓石(3)は、倒壊を免れている。法名の上に「景福中興開基」を加えており、受領名は「前作州刺史」としている。四代勝就の墓石は半折しており、五代以降の墓石には頭書を表してはいない。¹¹⁾

鳥取景福寺の墓域は整備され、江戸期の旧状を留めていない。約40基の墓石が隣接密集して配置されており、本来区分されていたであろう志摩守家本家、分家の当主・子女墓が混在している。確認できる初代から八代までの当主の墓石は、倉吉所在例と同じく板石を整形したものであり、幅70～80榿、高さ210～238榿であり、倉吉所在例と大差はない。七・八代の墓石が側縁に加えて頂部も円く仕上げる点は、倉吉所在例に等しい。



第5図 荒尾志摩守家墓石（2）・鳥取景福寺



第6図 荒尾志摩守家墓石(3)・鳥取景福寺

初代嵩就の墓石(1)は、側面を整形した下広上狭の形状の頂部を平坦にした板石を使用している。墓碑銘は「透閑院殿前志州吏鍊翁祐心居士」とするものであり、倉吉・満正寺墓石とは一部異なっている。また頭書は「魯」であり、異なっている。この頭書の意義も「死」と同じく明らかになっていない。

二代宣就の墓石(2)は下広上狭に整形し板石を使用しており、表面上部に「魯」の頭書を刻んでいる。法名と頭書は倉吉満正寺例に等しい。三代秀就の墓石(3)は他例と同じく板石を使用しているが、頂部を円く仕上げており、五代以降の基本形を明示している。

この板石使用例は、元禄・宝永年間まで鳥取城下で普遍的であった墓石型式であり、正徳・享保年以降に花崗岩の石材を使用した円頂方柱型墓石に定型化する以前の主体型式である。総体として花崗岩使用の円頂方柱型式墓石が主体を占める中で、板石を継続使用する意味は、執政職としての家系を明示したものと判断できる。同様の例は、八橋體玄寺の津田氏歴代当主墓にも確認できる。

景福寺において現状で確認できる花崗岩使用例は、分家から入った本家三代の養子になった豊就の享保十二(二七二七)年例(9)を最古としている。上部を平坦とする二段の基礎の上に幅60厘、高さ194厘の円頂方柱型

式墓石を建立している。

年代の知れる10・12・13の三基の墓石は、二段目の基礎上部の幅を狭めた定型化したものである。10は安永三(一七七四)年、12は文化四(一八〇七)年、13は寛政九(一七九七)年の紀年銘である。10・13は相応の規模の墓石であり、受領名を有さない「院殿居士」の法名であることから判断すれば分家の当主墓と考える。維新以後の墓石は14・15に実測・図示した。ともに頂部を尖らせた尖頂方柱型式であり、荒尾但馬守家の墓石様相に類似する。15は「舊因幡大夫荒尾恒就墓」であり、分家最後の当主墓である。

(3) 【津田家墓所】

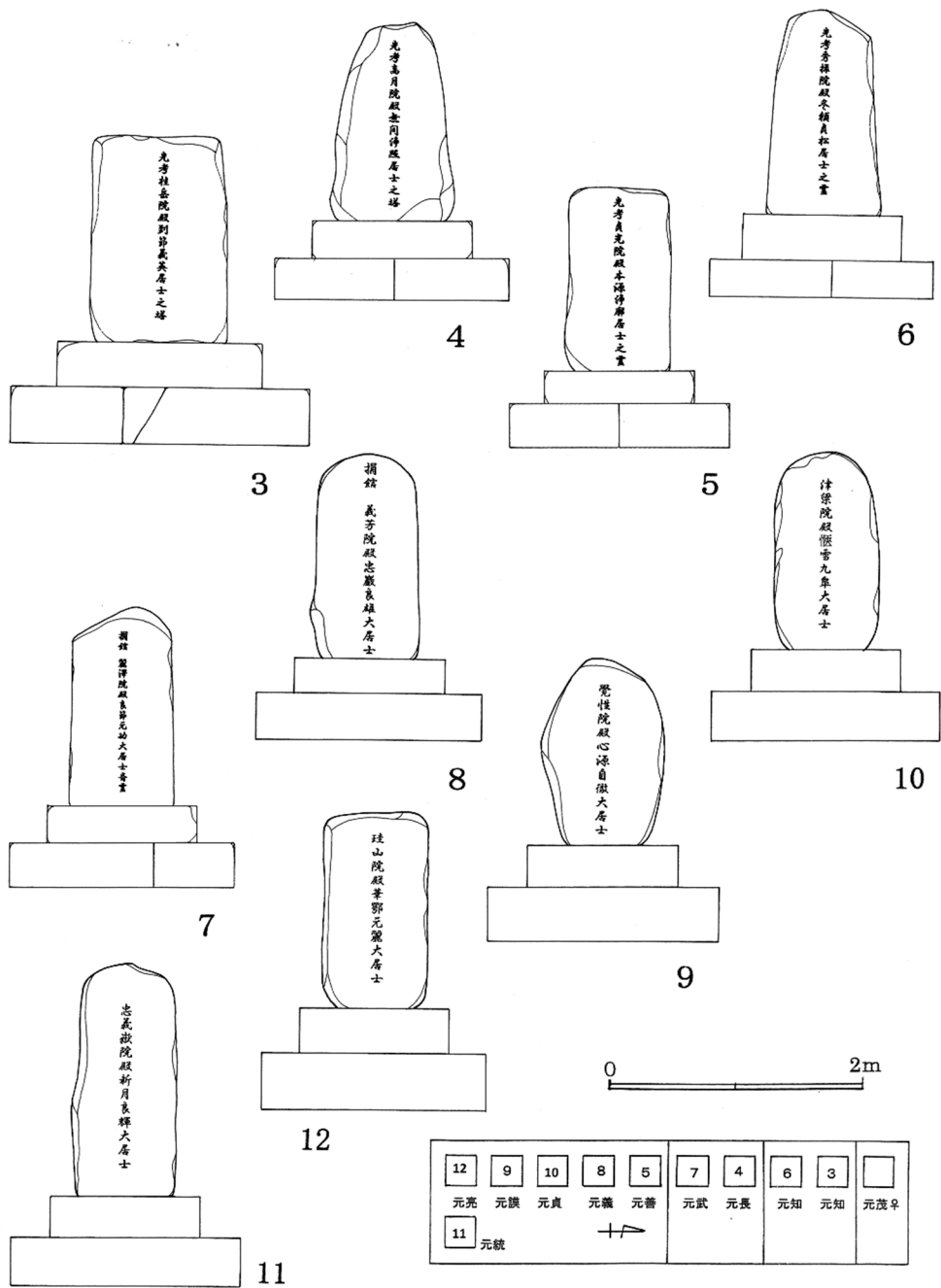
戦国期に尼子氏、次いで毛利氏が領有し、豊臣政権下では南条氏が拠点とし、江戸期初頭には市橋氏が配置された伯耆中部の要衝の地である八橋には、鳥取池田家家臣としては津田家が配置され陣屋を構え町政にあたった。

領主の津田家の菩提寺は、旧八橋城跡の背後の谷戸奥に立地する臨済宗・體玄寺である。墓所は本堂の背後の北に延びる尾根上に営まれており、段を造成して20米ほどの範囲で一列に配置されている。尾根先端から基部に従って、三代・元茂、六代・元知、四代・元長、七代・元武、五代・元善、八代・元義、十代・元貞、九代・元謨、十二代・元亮の墓石が列をなし、十二代の対面に十一代・元統の墓石を配置している。三代・元茂の墓石に続く尾根の先端部には、歴代当主内室墓として唯一元茂内室の墓石が、配置されている。

この歴代墓石配置からは、三代、四代、五代と順次造成して尾根の基部に従って歴代当主墓を造立し、六代は三代の隣、七代は四代の隣に配置し、以降は尾根上部に墓域を拡大して形成した状況が復元できる。

基本的に歴代当主墓石は全て安山岩の扁平な自然石を石材として使用しており、側面、背面などを整形して板石状に仕上げている。基礎は二段と共通しており、全て安山岩の切石使用している。墓石本体幅は80～108㎝、高さは144～166㎝、厚さ25～30㎝ほどである。これらのうち、三・五・六・十二代の墓石は、両縁を直線状、頂部を平坦に整形して長方形状を呈する。

墓碑銘は墓石表面中央に法名、両脇に没年と在世名を表している。三代から六代では法名の上に「先考」と表し、七代と八代では「捐館」としており、以降は直接法名を表している。「捐館」は「掩粧」と一對の頭書であり、男性に使用される館を捐る意である。江戸周辺では主に旗本の当主・内室墓石に使用されるものが目立つ。



八橋・體玄寺:津田家墓所

第7図 津田家墓石・八橋體玄寺

在世名は三代元茂の「俗名平姓津田氏前周防守元茂／孤子将監元長立」と表記し、以後の基本となっている。五代・元善の墓石では「俗名平姓津田氏前将監元善／孤子作次郎尉元知建立」とするものが最も長い。すべて嗣子の建立を明記している。

尾根の先端に位置する三代・元茂の内室の墓石は、先端の尖った幅50糎ほどの板石を使用したものであり、正面に蓮華を陰刻した幅68糎、高さ32糎の基礎の上に高さ220糎の本体を建立したものである。正面上部に月輪を刻み、この下に「清秀院蔭室榮繁信女塔」とするものである。⁽¹²⁾

鳥取の津田家の墓所は、景福寺に営まれている。しかし、荒尾志摩守家墓所と同じく整理縮小されて旧状を窺うことはできない。一坪ほどの敷地の中央に無縫塔が造立されており、昭和二十九年、十四代繁之の名を確認することができる。この無縫塔の周囲に江戸期の墓石を15基ほど集積している。元禄／正徳期までは板石使用の尖頂方形型墓石、以降は安山岩を使用した円頂方形型の定型化した墓石が認められる。尖頂方形型墓石段階の法名は院号であるのに対し、円頂方形型墓石段階の法名には院殿号を確認できる。

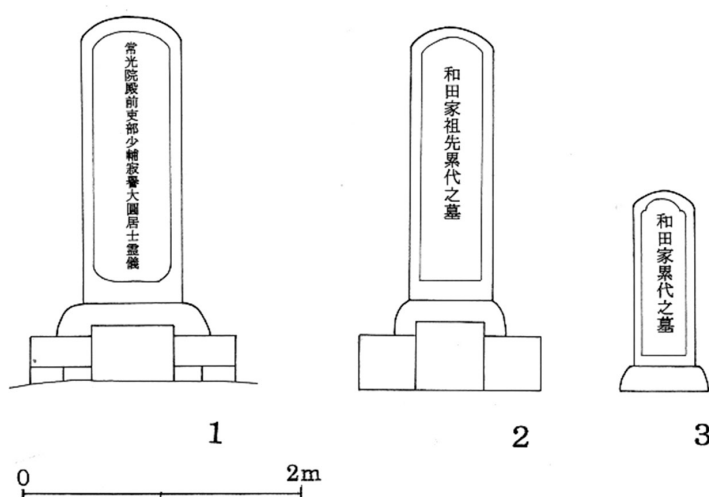
このほか鳥取・広徳寺の無縁墓中に、安山岩の自然石を使用した高さ70糎ほどの小形墓石に「慈照院心嶺妙安大姉／貞享四丁卯年／津田将監室」と確認できる。津田氏で将監を名乗った人物は四代元長、五代元善の二名であるが、没年から判断すると五代元善に27年先行して没した室であり、実家墓所に帰葬されたものと想定できる。

(4) 【和田家墓所】

伯耆国の東部、東郷池に臨む松崎の地は、和田氏が支配した。西向寺が在地の菩提寺とされるが、江戸期の痕跡に乏しい。墓地には、花崗岩を使用した円頂方形型墓標の幅44糎、高さ128糎の「和田家累代之墓」と、幅60糎、高さ200糎の「和田家祖先累代之墓」の2基を確認できる。ともに大正七年の紀年銘を有するものであり、昭和十八年の鳥取地震の後に鳥取の菩提寺から移設されたのは、後者の大型の墓石かと想える。二段の基礎の上部を円く狭める定型化した大型墓石の様相は、江戸期の石材の再利用と想定できる。

元禄七（一六九四）年に歿した、藩主池田光仲の信頼が厚かった和田三信の墓は、特別に藩主池田家の奥谷墓所に隣接する地に造営されている。花崗岩を石材として使用した二段の基礎の上に建立された円頂方形墓標である。一段目の基礎は切石を組合せ、二段目の基礎は上部を円く仕上げて幅を狭めている。本体は幅62糎、高さ210糎の規模であり、表面には「常光院殿前吏部少輔寂譽大圓居士靈儀」という浄土宗に特有の「譽号法名」の墓碑銘を刻んでいる。⁽¹³⁾

街時成謹撰



第8図 和田家墓石

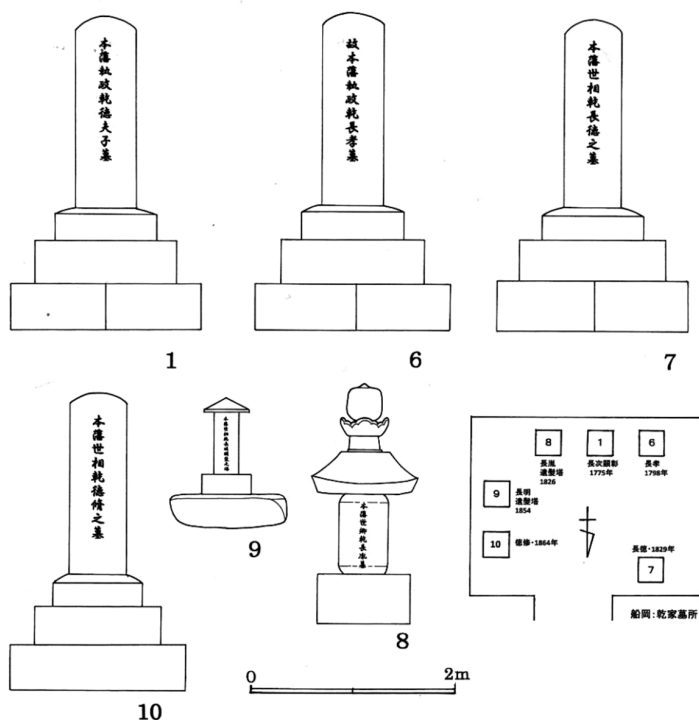
(5) 【乾家墓所】

因幡国の山間の要地である船岡の地は、乾家が支配領有した。乾家の在地の墓所は、街を東に臨む西側丘陵の北に開く谷戸の奥部に営まれており、かつては菩提寺として西来寺が存在していた。墓域は幅15米、奥行き8米ほどの規模であり、斜面奥の造成地の南側に3基、東側に2基、北側に1基の合計6基の墓石が配置されている。1は後代の供養塔、8・9は遺髪塔であり、6・7・10が通常の墓石である。⁽¹⁴⁾

1は安永四（一七七五）年に六代長孝によって、采邑船岡に菩提寺を造営したことに併せて建立された初代長次の供養塔であり、三段の基礎の上に幅60糎、高さ192糎の本体を造立している。表面には「本藩執政乾徳夫子墓」とし、裏面には以下の墓碑銘を記している。

「乾夫子姓源諱長次乾長氏也號乾徳院其先出於近江佐々木氏其考諱長房仕於室町幕府遇三好／之陷幕府與父防之力戰後隱於攝津與我護國君善君知其為于城之器也招之為臣遂歷事／護國君國清君於攝播之間元龜中織田公姉川之役護國君軍其左軍不競織田公之軍亦將緩／矣夫子直前驅馬追敵整軍諸隊為之奮織田公賞賜面甲今藏在於家天正中攝津華隈

之役與荒木／戰於生田且射且刺敵衆不支慶長中從征陸奥又從美濃關原之役大戰於新加納功爲最清泰君／之就封於淡路也夫子為傳創業是繁夫子孜孜臨政内外交修浪華夏之役我軍軍於今宮以清泰／君猶幼也余夫子總事分兵出於御堂進軍戰於穢多崎皆動與機會奏捷數次人服其勇汁知夫子以／其績五加祿迨清泰君徙於備前拜為執政世々相承相於本藩男長幾亦食邑千石夫子為人忼／慨質直乘義不撓以天文十三年甲辰生於攝津元和二年丙辰五月二十有九日病卒於備前享年七／十又三葬於岡山國清寺寬永中長幾從興禪君遷於因幡自夫子而六世是為長孝字子施安永四／乙未年六月宮一利於其采邑船岡建碑以祭銘曰制勝三軍受寄百里勲垂後昆之綱之紀／孝孫長孝建十



第9図 乾家墓石（1）・船岡

6は、寛政十（一七九八）年の六代長孝の墓石である。大きさはほぼ1に等しく、表面には「故本藩執政乾長孝墓」と表している。裏面には以下の墓碑銘を記している。

「夫子諱長孝字子施備藩世卿池田俊清君次子寶曆戊寅之歳為本藩世相乾豊長君後因冒／乾氏焉食禄四千五百石始稱甲斐後更平右衛門夫子好學博物練達事務偏精兵書兼長武技居／常耽者 本邦典故遂推其意解說異域載籍儒佛百家莫不究了皆於舊□外別構一家其書多傳於／世大道微言長孝志其尤著者云夫子歷事／岱嶽侯／大機侯從政前後三十六年其所建置頗有成績甚為／藩侯所重及至告老嫡子甲斐夫子承家襲禄而藩侯猶不許其去職特加優待別賜俸五百石俾得／養病別業與聞國政如故無何遂避賢路肥遯願志時時夫子弟輩講明其學寛政十年戊午／夫子年／六十季春患癰弗愈四月二十九日卒稱廣禪院殿瑞霖淨沛大居士遺命葬於乾氏祖 乾德夫子墓／側在其采邑船岡西來寺安永中夫子所親營也豊長君舊有布金之志未遂而即世故夫子繼述／焉超十二月／藩侯追賞金夫子及甲斐夫子功勞以夫子別俸五百石加賜甲斐夫子拜故所為五千石夫／子有三男伯乃甲斐夫子見為別卿仲求馬君出繼荒尾氏於京師季孝三郎君今春始冠稱／右京初夫子之疾革也正爾綿惓忽開眼正色口占數語授傳臣隨輒筆文凡三十七言雖未必無音／訓轉訛者要其大旨蓋其生平所自體認一家見解終始弗渝滄沛於是

者固不可註也及建墓碑因勒／其語於碑陰以不朽之也且碑面顯署以諱稱者亦奉其遺令也甲斐夫子命臣作碑文臣以營蒙夫／子寵渥不敢辭謝黽勉從事粗舉其所窺識一斑亦但懼詳略失所蔽虧德業也耳寛政十一年己未／三月臣伊良子憲謹撰／有防下之慮故不拘前跡縱橫自在心之所欲也從心之所欲者有所主也安仁而不敢自立」

すなわち乾家六代の長孝は、備藩世卿すなわち岡山藩家老の池田俊清の次子であり、「夫子好學博物練達事務偏精兵書兼長武技居常耽者本邦典故遂推其意解說異域載籍儒佛百家莫不究了皆於舊□外別構一家其書多傳於世大道微言長孝志其尤著者云」と好學である点が明記されている。長孝の著作としては、神道・儒教・仏教を論じた『大道微言』、軍事に関する『長孝志』、政治の弊害について論じた『知難録』、儒学の変遷を記した『古今學變』、『表記』などが今に因幡に伝わっている。¹⁵⁾

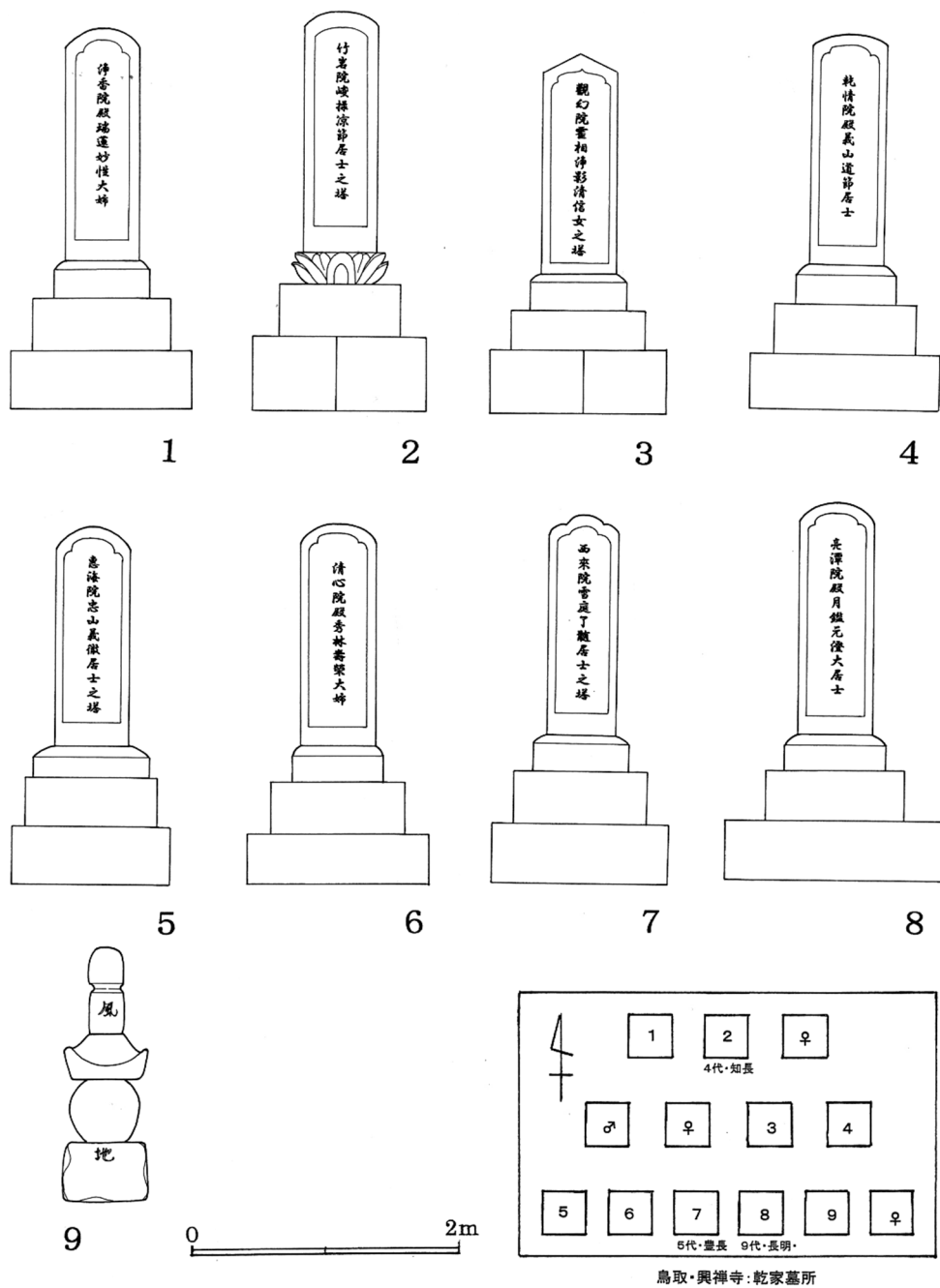
7は、文政十二（一八二九）年の七代長徳の墓石である。大きさは1・6に等しく、表面に「本藩世相乾長徳之墓」と表している。墓石の裏面には、「乾夫子諱長徳幼名清之助後改甲斐孝諱長孝字子施備前世卿池田俊清之次子也／爲祖豐長君之嗣焉夫子以明和二年乙酉三月六日生天明二年壬寅八月十一日因／例與父長孝君同執政於是別賜職俸千石八年戊申及長孝君告老承家襲祿生一男／二女男迺長胤君也雖夫子未至懸車年以疾故寛政十二年庚申九月二十二日辭職／告老長胤君承家在職文政九年丙戌歲先夫子卒其嫡子長國君承家襲祿文政十二／己丑年十一月二十六日疾卒於莊享年六十有五葬於食邑船岡□□□先塋列法諡／曰高堅院殿忠嚴道固大居士」の墓碑銘を記している。

8は八代長胤の遺髪塔であり、総高240糎の小形の變形宝塔である。本来宝塔は長い相輪を伴うところを、宝珠と請化としている。表面には「本藩世卿乾長胤墓」と表し、裏面には「夫子窀穸在鳥府興禪寺而此則所藏其鬢／髮之處也蓋夫子以其 王父廣澤夫子創／墓地於此處故亦不以自遺命特藏其鬢毛／以自表其不失爲其慈孫之志云爾／臣伊良子憲謹誌」

9は九代長明の遺髪塔である。上部に小型の笠を乗せた、総高126糎の笠付方柱墓標である。表面には「本藩世卿乾長明額髮之塔」と表している。

10は、元治元（一八六四）年に二十二歳で没した十代穂脩の墓石である。他例と同じ規模の墓石であり、表面には「本藩世卿乾穂脩之墓」と表している。

鳥取の乾家の墓所は、興禪寺に営まれている。本堂裏の斜面地を造成して造営されており、幅10米、奥行き5米ほどの範囲に三列に15基の墓石が建立されている。花崗岩を石材として使用した三段の基礎を有する定型した墓石と、凝灰岩を石材として用いた一基



第10図 乾家墓石（2）・鳥取興禪寺

の五輪塔が配列されている。

五輪塔は総高200厘ほどの規模であり空風輪と地輪に五大種子の文字を確認できるのみである。花崗岩製の墓石は、通常の頂部を円く整形するほかに三弧とする例、尖頂とする例などが造立されている。

2は四代・知長の墓石であり、本体幅56厘、高さ184厘の規模である。他例と異なって唯一蓮華座を伴っている。表面に「竹岩院殿峻操涼節居士之塔／享保二英丁酉年五月七日／俗名乾氏前房州知長」としており、以後の基本となっている。

この他に確認できる歴代当主墓は、7が宝暦七（一七五七）年に没した五代・豊長の墓石であり、8が嘉永七（一八五四）年に没した九代・長明の墓石である。船岡の遺髪塔に「夫子窆窆在鳥府興禪寺」とある文政九（一八二六）年に没した八代・長胤の墓石は墓碑銘の記載が十分ではなく特定できないが、他例の紀年銘と法名型式を勘案すると、4の可能性が高いものである。

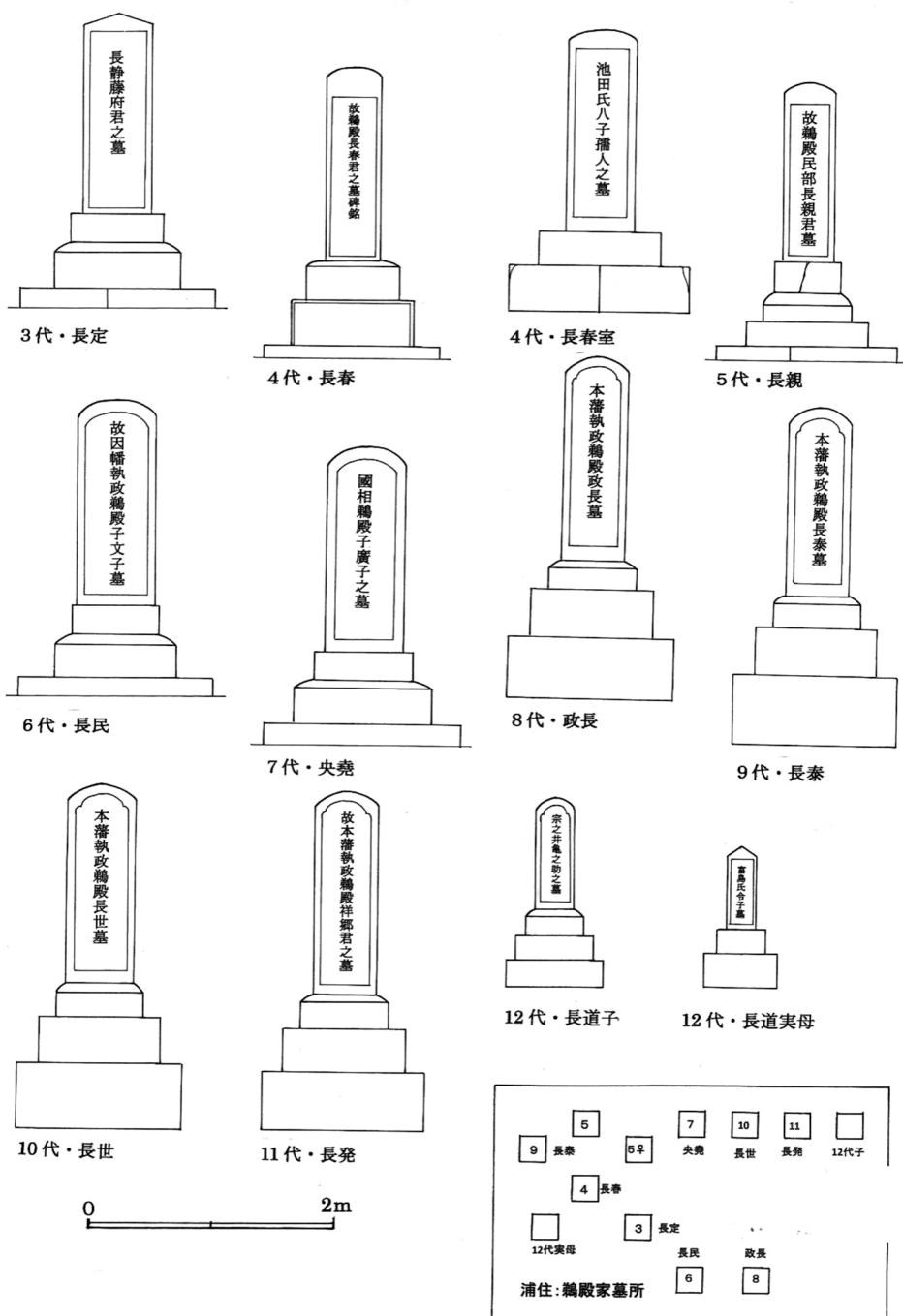
（6）【鵜殿家墓所】

鵜殿家墓所は、因幡国の東端の要津である浦富の奥市山に営まれている。谷奥の斜面を造成して幅15米、奥行き10米規模の平坦面を確保し、三代・長定から十一代・長発までの歴代当主墓石を主体として十二基の墓石が建立されている。これらの墓石は、先行例は安山岩・砂岩を石材として使用しており、後代は花崗岩使用に定型している。¹⁶

三代・長定の墓石は墓域の奥側に配置されており、入り口方向である西側に向いて造立されている。三段の基礎は通常とは異なって二段目の上部が円く収束して幅を狭めており、この上に上部平坦な三段目を乗せている。本体は幅56厘、高さ168厘の尖頂方形型式の墓標である。正面には、上部を直線的に大きく膨らめて「長静藤府君之墓」と鐫刻している。

尖頂方形型式の墓標は因幡国内では稀例であり、「○○君之墓」とする表記法からは、儒葬儀礼との関連が窺われるところである。本体裏面には、以下の墓碑銘を刻んでいる。

「府君姓藤原氏鵜殿諱長定稱大隅當州之至宝也考大隅諱長之母荒／尾氏其先出于淡路公公之後苗屬於源右將受封于紀州鵜殿邑子孫／因氏焉其後徙居參州有十郎三郎長祐者／東照神君潛龍之時屬麾下戰死于參州錢崎野其子勝助長忠爲封爲預／長有女 幸於 神君生元女良正夫人夫人降嫁於 參議輝政君輝／政君卒後 夫人寡居 備陽侯猶幼以故上請招於長忠之子大隅長／次 神君命長次往備州矣興禪侯新就于因州長次從之遂爲世臣／食邑於州之浦富縣長次之子長之娶荒尾志摩嵩就之女寛文十二年／乙亥十二月朔生君於府下第小



第11図 鶴殿家墓石(1)・浦留奥市山

名龜之助後號民部甫著袴時 興禪／侯賜禮服幼齡質武城屢拜謁／大猷大君萬治元年七月長之捐館九月拜命於苦居襲封貞享二年二月／改名大隅元禄十年閏二月告老致仕號藤馬令嗣長春襲封當国事一／日 清源侯召君慰老賜古画一幅恩遇殊厚寶永二年 今因侯命君／乘輿出入城門此年八月薙髮號長靜享保五年四月鳥府城大火延及／第舍徙居別莊六月十日俄爾病發終焉別莊享年八十五殯府下妙要／寺葬于采邑浦富縣奥市山君娶荒尾修理成直之女生長春晚年有女／嫁荒尾内記成庸君爲人不踐迹不逆詐剛毅質朴老而益堅若其平素／事蹟載在家乘不誌焉／孝子長春立 十街信敏撰」

すなわち三代・長定は、鵜殿長之を父として荒尾志摩嵩就之女を母として寛文十二年に生まれ、享保五年に八十五歳で没したことが確認できる。

四代・長春の墓石は、三代・長定墓石より奥まった位置に配置されている。現状では最下段の高さを低くし、三段目の上部を円くして幅を狭め、この上に幅44糎、高さ160糎の本体を建立している。頂部を円く仕上げた円頂方形墓標であり、正面の上部24糎をあけ以下を上部を直線的に窪ませている。正面上部には四行にわたって「故鵜殿／長春君／之墓碑／銘」と表し、下部の窪ませた内部に墓碑銘を刻んでいる。

「君諱長春字和卿姓鵜殿氏初稱民部後稱大隅世爲 因侯之宰食邑因州浦富其先出自中將藤實方實方五世孫爲熊野／別當湛増湛増之子某始居新宮鵜殿邑因氏焉其後移參州鎌形爲州之巨族兼食新宮其後裔長治居西郡栢原城隸今川／氏麾下後奉仕／東照宮有四男二女長女侍 宮號西部君生 良正夫人夫人始適北條氏直長忠之子長次以外家之好勝焉北條氏敗／夫人再醮 參議池田輝政卿卿卒 忠繼嗣夫人請于 公上招致長次自是臣于池田家食邑五千石有子五人曰長堯／長直長重長之長義三子留江府長之長義臣池田家寛永九年 侯自備州移領因伯二州随徒焉長次告老長之襲禄配池／田氏長明之女荒尾氏嵩就之子長之歿長定嗣仍稱大隅配荒尾氏成直之女有子男一人乃君也女子一人適荒尾成虎君／以萬治四年己亥五月廿一日生於因之私第甫六歲侍子江府明年始奉謁 公上元禄十年長定致仕 侯乃命君襲世／禄掌國務十六年関在大震江府城壘多地 官命諸州牧伯修築 因侯預焉 侯乃使君督理明年甲申功茲公上賞其勞勩賜賚優等 侯亦設宴酬以衣服名刀累請告老不許享保元年冬興告三年再掌國務既以衰老請告者數矣／許輿而出入城門十五年冬十月病劇十二日卒于正寢享年七十二葬浦富邑奥市山先塋之次初娶備州宰池田武憲之女／先卒再娶同僚津田元長之女亦卒繼娶松平政武之女無子養同族長政之子長親以爲嗣君爲人博聞強識嚴而不苟和而／不流自奉甚儉宰國政務三十餘年每随侯來觀或主留務孜孜裁決未嘗告勞執事平允國人服焉官暇讀書手卷或至天明／時延文士討經賦詩平素未嘗爲言之疾邑之邊也聞其歿者無貴賤無不盡傷君嘗信先子之道通問者有年矣拳世之士

大／夫執事而能不負其學者稱君君既歿其府之士録君之官世行治之略俾予銘其墓隧因係之銘云／羽林之後 熊野食邑 世不乏人 業顯
 功立 昌運丕門 群雄景從 乃祖知命 附鳳舉龍 惟君襲職 因之鉅室 文濟之武 名副怨實 豈曰弗壽 大尚怨天 流芳千歲
 桓碑巍然伊藤長胤謹撰 孝子長親建」

四代・長春は、母は荒尾但馬成直の女であり、外祖父は荒尾志摩嵩就という藩内きつての名門の出身であった。六歳の時に証人と
 して江戸に出府し、帰国後に古市道通・十街晚庵について四書五経を学んだ。また江戸出府時には幕府儒官林鳳岡父子にも学び、京
 都の伊藤東涯にも教えをうけている。長春の学識は「長春林家に学び、文学有り。人と爲り博聞弘識、嚴にして苛ならず、和にして
 流れず。」とされる。⁽¹⁾

四代・長春の先妻の墓石も、隣接して配置されている。後補された上部を平坦とする基礎二段の上に幅56㍿、高さ168㍿の本体を乗
 せ、頂部を円く仕上げ、正面は上部を直線的として柁を残して全体を彫り窪めている。正面には「池田八子孺人之墓」とし、両側面
 と裏面に墓碑銘を刻んでいる。この表記法は、儒葬儀礼に則ったものである。

「儒人池田氏諱八千備陽府人也故拾遺中大夫兼石州刺史源輝澄／公之孫尚食奉御武憲之女州之大姓鵜戸部長春之室也武憲年聘／通
 儒熊澤氏之女生三女孺人其長也儀容端麗坤德柔順忿戾之／兆終身不形于聲色女子室之時事父至孝衣食飲饌躬自奉晨昏不／敢使侍婢
 當之雖毓秀于名門不敢以華貴自居焉天資巧慧前剪製／縷結或彈奏爭操新聲或鼓雅琴古樂其他婦功不刻意 而能輒遇／人也婦於家之日
 雖二姓好翁不敢褻相敬如賓自一醺暨三年郎君／未嘗見偃臥之情容也移孝事舅氏猶父而常恨不及侍養于皇姑矣／儒人遵嬪則之外頗嗜倭
 歌而無一詞及燕昵之私每章出於不遺親／之孝情也竊慕鄒魯之教學庸之類略曉大義具婦儀婦功罔不迪典訓矣嗟乎胡暇之訛稟命不淑年方
 二十有三元禄癸酉正月八日縈／疾掩粧於南廓門外第其襲歛之制聊徇儒禮而藁葬于仁祠遷柩於／采邑浦富而塋焉郎君自狀孺人之行召僕
 以議曰如荊妻誌生卒於／其墓則足矣嗚呼孺人之淑德不可以蔽其美乃按狀文剡其著者叙／之墓碑之左後右元禄六年六月庚寅州之儒臣晚
 菴辻達謹志」

五代・長親の墓石は、墓域の奥側に四代墓石と並置している。砂岩を石材として使用しており、現状の基礎は四段である。上部が
 狭まった上に一段を積み、この上に幅42㍿、高さ148㍿の本体を乗せている。四段目の基礎石は半折し、最下段は陥没している。

頂部を円く整形した円頂方形墓標であり、正面は上部を直線的として全体を彫り窪め「故鵜殿民部長親君墓」と表している。墓碑
 銘は裏面に短く表されている。この墓石も、儒葬に従ったものと思える。

「君姓鵜殿諱長親称民部始称斎宮長喬世爲／因侯之宰臣食禄五千石父長春府君称大隅母松平政武之女／真父幕府士鵜殿長政以元禄十六年癸未八月十八日生于江／府正徳五年乙未五月廿五日来因州享保十五年十月十二日／長春府君歿君襲世禄享保十七年十二月入政府掌國務元文／元年丙辰五月十三日俄然病發卒于正寢享年二十四葬於采／地浦富奥市山先塋次法號壽徳院道詮日量配先府君之女有／男二人女三人長子長和次某女適同僚荒尾成昌」

五代長親は、幕臣鵜殿長政の四男であり、養われて嗣子となった。鵜殿長政は良正院に請われて岡山に來た長次の五人の男子のうちの次男・長直の三代の子孫であり、千石の家禄であった。長親は享保十五（一七三〇）年に家督を継ぎ十七年に家老職に就いたが、元文元（一七三六）年二十四歳で逝去している。

宝暦四（一七五四）年に歿した六代・長民、宝暦十（一七六〇）年に歿した七代・中堯の墓石は類似している。すべて花崗岩を使用した中央の段の上部幅を狭めた三段の基礎の上に幅64糎、高さ170糎の本体を建立したものである。六代の基礎は若干陥没している。この二基の墓石は、八代以降に定型した鳥府通有の墓石型式とは形状をやや異にしている。三段の基礎の中央石の上面の幅を狭める点と、本体の幅が広い点である。儒式と仏式墓石の折衷形と思われるところである。

六代・長民の墓石表面には「故因幡執政鵜殿子文子墓」と表し、裏面に墓碑銘を刻んでいる。

「夫子姓藤原諱長民字子文壽徳君諱長親子也／世以鵜殿爲族相于我 藩語具其先之碑云乃祖大智君忠儉文雅名在列國夫子自幼承遺訓／慨然嚮于之學士之有學術者則必延接親之必／以禮下之人多歸心焉夫子奉身甚薄恪慎正色／口無戲言人敬之寶暦三年辛酉 命入政府明／年春正月始之 江戸視事 藩邸夏五月以疾／請還病革于途六月甲寅卒于兵庫驛人皆哀惜／辛酉歸葬其邑浦富先塋側年二十一矣 矣號實／成院銘曰／於卓彼祖 是矜是成 恭可銘鼎 儉可示國 人之思之 允在令徳／享年不永風聲無熄／箕浦世亮謹撰」

七代・央暁の墓石表面に「國相鵜殿子廣子之墓」と表し、裏面に墓碑銘を刻んでいる。

「夫子諱央堯字子廣 藩別封爰叡侯第三子也元文三年戊子／生于 江戸之邸寶暦四年甲戌 藩相鵜殿子文子没無子同／位相議請夫子爲嗣越明年来自 江戸邸入政府爲人寬綽疏／通好學其待物也無一毫疑忌之心又不自知位祿之在己也是／以上皆樂且莫而見之六年丙子 藩初基置學使國子弟受業／夫子有力焉十年庚辰七月六日病歿年二十有二葬于采邑浦／富先塋之次號開權院 備前別封隆興侯文子爲嗣古云天監／于民降年有永有永若夫子宜保永年者非邪何哉其卒葬天／者嗟乎以其視事之日浅也身歿數年于今人猶往往稱之墮淚／遺愛之名不泯其謂之不夭乎／箕浦世亮謹撰」

すなわち七代・央暁は、鳥取藩初代藩主である光仲の次男の仲澄が三万石を分与されて立藩した因幡鹿奴藩の二代藩主仲央の第三子であり、宝暦五（一七五五）年に襲封したが十年に二十二歳で逝去している。

八代以降十一代までの墓石は鳥府に普遍化した墓石型式であり、花崗岩を石材として使用し三段の基礎の最上段の上部の幅を狭めて、この上に本体を建立している。本体幅52～56糎、高さ156～168糎の大きさである。

八代・政長の墓石表面には、「本藩執政鵜殿政長墓」とし、裏面に墓碑銘を刻んでいる。「夫子初名政永備前別封従五位下丹波守源君第二子／元文元年丙辰六月二十四日生于備前州岡山寶暦十／年庚辰我藩執政鵜殿忠堯没無子明年辛巳夫子來爲／嗣乃冒姓藤原更名政長字君元其家世篤文学夫子亦／爲溫雅敬于奉上恭于接下涉史籍翰鈴善書好和歌凡／在衆技躬必研究明和七年庚寅始入政府視事十六年／天明五年乙巳十月十七日病没享年五十葬于此地先／塋之次號寶塔院光山日開其配在原氏先没無子以藩／首荒尾氏成熙第二子爲嗣配其女 銘曰 雅敬維恭 承先垂後 何不綿綿 其墓也厚／箕浦徳胤謹撰」

すなわち八代・政長は、備中生坂藩第二代藩主池田丹波守政晴の第二子であり、宝暦十一（一七六一）年に家督を継ぎ、明和七（一七七〇）年に家老職に就き、天明五（一七八五）年に五十歳で歿している。

九代・長泰の墓石表面には、「本藩執政鵜殿長泰墓」と表し、裏面に墓碑銘を刻んでいる。「夫子諱長泰本姓在原氏我 藩第一卿荒尾成熙第二子小／字安十郎更名要人又改大隅又稱縫殿之助後称長祐以安／永二年癸巳十二月二十五日生爲人寬厚有容衆之量天明／五年出爲第五卿藤原政長養子承其祿位配其息女因冒鵜／殿氏寛政三年始入政府爾後聽事列于月番往來于 東都／凡五文化八年辭職十年致仕文政七年甲申正月十九日卒／享年五十二葬于采地于先塋之次號等耀院殿／銘曰 居氣養體 室巨望高 身任桂石 心憎枯棹 仁被民仰 忠爲君褒 請告之後 猶尚賢勞／外臣伊良子憲謹撰」

すなわち、九代・長泰は荒尾但馬守家の成熙の第二子であり、寛政五（一七九三）年に家老職に就き、文政四（一八二一）年に五十二歳で歿している。

十代・長世の墓石表面には、「本藩執政鵜殿長世墓」と表し、両側面および裏面に墓碑銘を刻んでいる。

「大夫君大職冠苗裔孫也事具家牒姓鵜殿諱長世幼称次郎太郎又称信濃／更藤太郎後改采女承考諱長祐在原孤卿成熙第二子爲祖政長贅子令慈／廼祖政長女也君以天明八年戊申二月十一日生文化十年癸酉二月三日／廼公以疾辭職營菟裘故立承家同十二年乙亥五月七日執國政同十三年／丙子留守於 東都邸同十四年丁丑歸國文政二年己卯從 述職朝於／東都同四月十五日拜謁於兩府下違例同三年庚辰

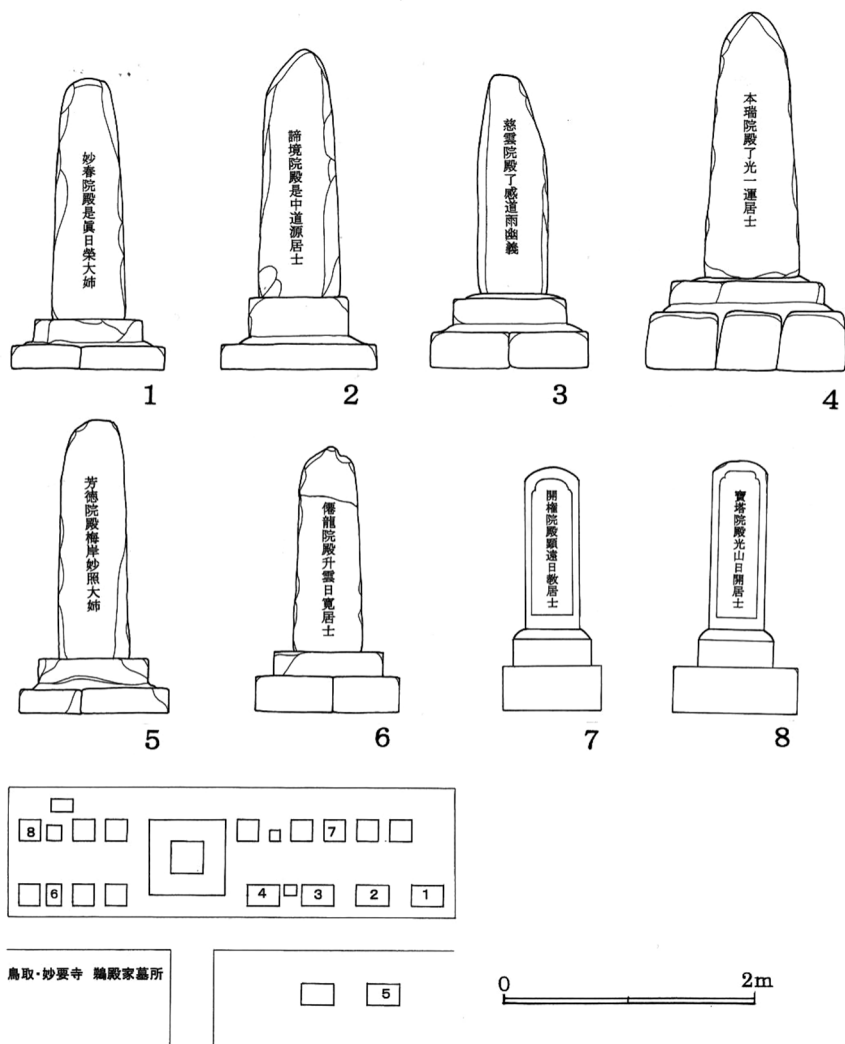
四月十八日復拝謁於／兩府如前茲歲應陪席歸國有 命令留在邸同四年辛巳四月拔爲度文章／於是六月至攝大坂有控搏事事得辯畢歸邸同五年癸午留在 邸以有／大功勞於大坂 公特賜備前州紀道員信所鍛短劍以葵草飭蓋褒賞之云／同四月歸國然後孜孜爲備水旱凶饑謀事未就同六年癸未八月以疾辭職／同七年甲申正月十九日罹罔極之痛襄事及居喪之禮維慎矣閏八月二／十五日疾卒享年三十有七葬食邑岩井縣浦留先塋列釋氏諡之光麗院君／温而卓犖牢記無他嗜好雖飲酒未嘗變豈弟之聽德唯茗理是嗜豈以靜淨／故歟不欲難得器大患今時闢器物徒也居則列茗具於側雖疾以爲常易簪／前十日且猶招大寫某佐藤某披茗燕自執茶鋏至厨中割烹不敢以近侍臣／饗待終日言笑自若焉嘉亦以所知得只尺於今如視之廼銘／治家思儉 執政依仁 不敢繼富 在欲賑貧 體不役物 顏不拒人 與海同量 與山均岫 不吐茹 無疎無親 巖巖守望 赫赫慎身／德既川流 祥亦丘臻 桂石云頹 棟梁載泯 徽猷誰嗣 儀範誰遵／仰慕餘烈 俯帳遺神／建部嘉謹撰并書」

すなわち十代・長世は、文化七（一一一〇）年に家督を継ぎ、十二（一一一五）年に家老職に就き、大坂に至りて折衝に功あり、斉稷公賞するに短剣を以てしている。文政七（一一二四）年に三十七歳で歿している。

十一代・長発の墓石の表面には「故本藩執政鵜殿祥郷氏君之墓」と表し、両側面および裏面に墓碑銘を刻んでいる。

「夫子本姓平名長發字祥郷氏 本藩世卿津田元謨君第三子也文政七甲申歳爲世／卿鵜殿長世君後因冒鵜殿氏食禄五千石初称豊之助後更藤輔 夫子好學強記博／覽雖諸子百家及兵家者流之書莫不究了兼長武枝文政九丙戌歳九月入政府掌／國務天保十三壬寅歳九月拔爲度文章数年而 国家殷富焉於是爲海濱防禦更製／器械頗有成績弘化元甲辰歳有修築築 國城之事使 夫子督理同三丙午歳功成／藩侯賞其功勞加禄千石嘉永四辛亥歳以病辭職逍遙事外自養其性同六癸丑歳十／一月請老會花旗國人率軍艦數艘來於 東都 官命諸侯戊海邊 侯時在 東都／急召 風刺明年正月強起奔 命即使 夫子帥師陣武州本牧海濱凡四十有六日／卒戊而退方今昇平久雖人以治不忘亂爲常言豈虞有今日舉哉 夫子則不然常以／備豫不虞爲務以故速率師徒而奔命事後 侯賜容刀及金若干以勞之同五月／歸國而後遂告老 夫子有一女四男長女嫁 和田鐵之丞君嫡子 藤次郎君嗣／爲世卿次男 雄次郎君次男邦之助君爲 和田和田鐵之丞君後次男小四郎君／夫子歷事／輝國侯 端德侯 正國侯 榮岳侯今少將侯從政前後二十九年祇役於 東都／凡七安政三丙辰歳月十一月二十九日病卒享年五十四法諡恭敬院殿望嶽智本日／治大居士葬采邑浦留奥市山先塋側銘曰／俊而好學練達時宜富國強兵戰事咸熙土功既成福祿斯綏肥遯頤志名存墓碑／田中幾謹撰」

すなわち十一代長發は、本藩世卿津田元謨の第三子であり、十代長世に嗣子なき後の文政七（一一二四）年に家督を継いだ。九



第12図 鵜殿家墓石(2)・鳥取妙要寺

年に家老職に就き、浦留の海浜警備を強化するとともに、安政元(一八五四)年には東都に出でて本牧の警備を担当した。安政三(一八五六)年に五十四歳で歿している。

鵜殿家の鳥府における菩提寺は、法華宗陣門流の妙要寺である。現状は墓石が整理されて集成されているものの、旧状を留めている部分もある。整理にあつては、幅3米、長さ15米ほどの東西に長い区画の中央部に大形の無縫塔を建立して「鵜殿家の廟」と表している。

この墓域では、幅56×76厘、高さ168×218厘の板石を用いた大形の墓標が目立つ。7基が遺存するうち、紀年

銘と俗名が確認できた6例を図示した。1～4は一列に東西に配置されている。1は元禄十一（一六九八）年の長成室の墓標であり、頭書は「還本」とする。2は元禄九（一六九六）年に五十六歳で歿した長成の墓標であり、頭書は「妙法」とする。3は元禄五（一六九二）年に二十九歳で歿した長信の墓標であり、頭書は「圓空」とする。4は元禄二（一六八九）年に八十五歳で歿した長義の墓標であり、頭書は「妙法」とする。5は元禄十三（一七〇〇）年の長保内室の墓標であり、頭書は「歸眞」とする。6は他と離れて配置された享保五（一七二〇）年の長定の墓標である。

これらの大形板石墓標は、長次の後に池田家臣として着座家を継いだ四男の鵜殿長之系と、池田家臣となった分家の五男長義系の墓標である。着座家では唯一6の三代長定の墓標のみである。

浦富奥市山の長定の墓標には、「六月十日俄爾病發終焉別莊享年八十五殯府下妙要寺葬于采邑浦富縣奥市山」と確認でき、妙要寺で葬儀を行い奥市山に埋葬したことが確認できる。即ち妙要寺には、詣り墓を建立したことが分かる。

1～5は、分家の長義系鵜殿家の墓石であり、長義（4）↓長成室（1）↓長信（3）・長保（5）の変遷である。

妙要寺には歴代当主墓として、ともに花崗岩を使用した7の七代史堯墓、8の八代政長の墓石も確認できる。7は二段の基礎の上に本体を乗せた総高200㎝、8は206㎝の大きさである。これを奥市山墓所所在例と比較すると、ともに三段基礎の7は248㎝、8は284㎝と確認でき、埋め墓としての奥市山例が大きい。また八代例は双方が鳥府通有墓石型式と確認できるのに対し、七代例では妙要寺例は通有、奥市山例は特異型式と墓石型式を異にしている。

（7）【山池池田家墓所】

山池池田家は池田恒興の長男之助の家系であり、池田之政が初代となった。墓所は鳥取・広徳寺と玄忠寺に営まれたが、広徳寺は再整理されて墓域が維持されているのに対し、玄忠寺所在の墓石は全て倒壊している。¹⁵

広徳寺所在墓石は本堂横の墓地奥にし字状に配置されており、旧状を留めるものではない。1は高さ70㎝の切石使用の基壇の上に基礎を置き、この上に幅60㎝、高さ190㎝の尖頂方形墓標を造立している。本体正面中央には「松原院殿前日芻寂室常光大居士」と刻み、法名の下部に「寛文九己酉歲／孟春初七日」と没年を表している。法名の左右には以下の墓碑銘を刻んでいる。

「居士姓源氏池田諱之政自呼日芻至家系称清和帝之末葉頼光公五代瀧口参政号池田左馬允其嗣胤撰州住人池田九郎□依其長子曰池

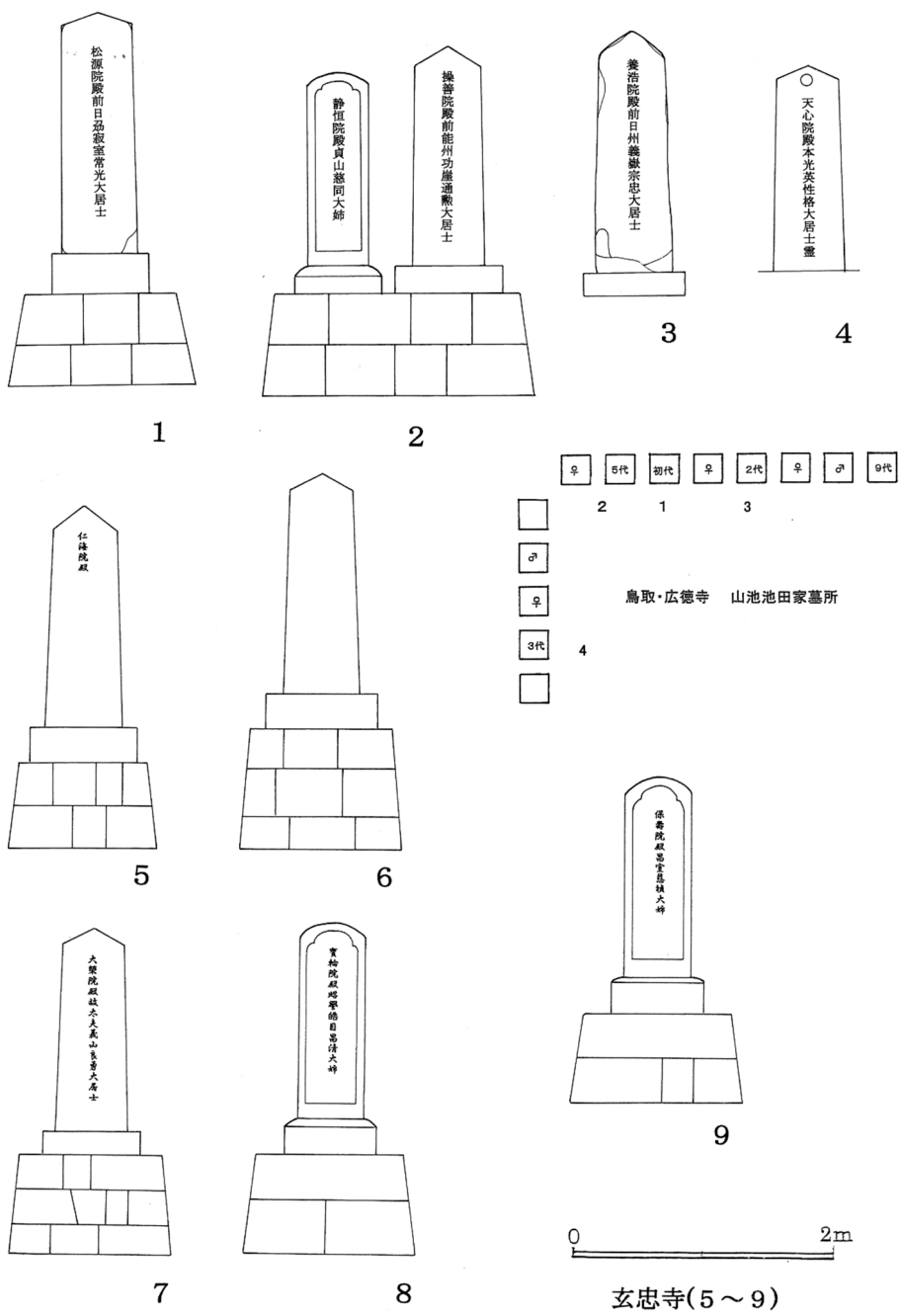
田十郎敬正後称兵庫助而於將軍義詮公義満公之時／顯武右府子曰佐正之々子号池田六郎爾來相統称池田其曾孫池田紀伊守恒利仕万松院義胆公長子池田紀伊守恒興從軍信長公政里崎時戰功勝□諸人依是厚當及餘乃賜信字改号信輝後剃髮曰勝入其長男池田紀伊守之助花熊一戰之時軍忠於長手父子共戰侵□之助嫡子池田出羽守由之為播磨明石城主後移伯州米子城歷年久居士其四男也元和三丁巳八月晦日瑞産□城裡幻耳之比遊安帝畿及狀耳因伯二州之大守公招居士賜□若干食邑又任一部之將使指揮数千兵卒且見功木英傑而□主國柄雖職重敢不辭而就焉從爾功來夙興夜寢日々不顧哺握勞待且而入及暮而退其或兆民未安思所泰之田疇多蕪何以關久雄賢在外將進之倭姦在肉將作之頃刻不□□々珞□劫耳因是國君拱手遷於上臣民好善勞於下法乎天理皆倭居士之功者乎誠是桓公於仲父如飛鴻之有羽翼也漢祖於留信如以石而投□水也國君於居士如奥之有水也居士之性尋常算橫木強而有諫訴則不見其西朴實亦可知焉雖然善接人上下相通内外災加故拳國皆依頼焉況於摩下之諸士乎可謂得人□或時居士嬰□病疾□今嗣殆病寢食湯藥必嘗進之良欲病急時國君聽之遣使問之或狂駕慰問之諸士名醫不絶如□嗚呼不佞之年天哉令哉換骨神之靈方妙術無驗享年五十有三寛文九巳酉年正月七日終卒於正寢令嗣之病哭閨國之哀慟異恒到此葬□廣德寺禪法諱改松源院殿前日芻寂室常光大居士行喪尤善立洪石於其上令當十有三霜古人日親者人之所不忘也而君子慎之故為慕為廟封溝之嘗□之為為思而悲哀之所以存其思也令嗣侯是改旧墓集奇石高堅其塚而建建唱首龜趺之石以記行業欲令子孫見之善繼志追遠永垂昆久傳無窮也故請碑銘於余々感愼□之孝思而不幌□語粗記其事為之銘其詞曰 於戲居士 非常勲功 情心剛毅 事有始終 好文勵武 居安慎危 齊宗治国 為人訓規 忠上化下 内直外涼 言語當我 敬佛敬神 孫枝子葉 茂志万年 姓名碑石 共長相傳 延寶九辛酉正月十日 池田日芻之信立之 花園第一座□永記

すなわちこの墓石は、元和三（一六二七）年に米子城で生まれ、岡山に往き正保元（一六四四）年に因幡に移り寛文二（一六六二）年に家老職に就き、寛文九（一六六九）年に五十三歳で歿した初代之政の墓石であり、延宝九（一六八一）年に嗣子の之信によって建立されたことが確認できる。

2 は切石使用の同一の基壇上に並立された五代・之茂と内室の墓石である。五代・之茂の墓石は一段の基礎の上に造立された幅56cm、高さ172cmの尖頂方形型式墓標であり、「操善院殿前能州功崖通勲大居士／文化三丙寅十一月十一日」と法名と没年を記している。五代・之茂は鳥取支藩である若桜藩2代藩主定賢の第三子であり、宝暦四年に家老職に就き、文化三（一八〇六）年に七十六歳で歿している。

3 は再整理されて墓標本体が並列された、幅62cm、高さ190cmの尖頂方形型式墓標である。「養浩院殿前日州義嶽宗忠大居士／元禄

鳥取藩池田家における家老墓の様相



第13図 山池池田家墓石・鳥取広徳寺・玄忠寺

十二己卯曆四月初五日」の墓碑銘が刻まれており、二代之信の墓石と確認できる。二代之信は、初代之政の長男であり、天和二年に家老職に就き、元禄十二（一六九九）年に歿している。

4は墓標本体のみが再整理されて並列されている墓石であり、幅56cm、高さ162cmの尖頂方形型墓標である。墓碑銘は「天心院殿本光英性大居士霊／享保八癸卯稔五月十有八日」であり、三代之成の墓石と確認できる。三代之成は岡山藩家老の天城池田家出身の番頭池田忠義の子の吉左衛門義陣の第二子であり、父の忠義は初代之政の兄弟である。宝永七年江戸留守居となり享保三（一七一八）年に三十五歳で歿している。

5・9は玄忠寺に遺存する墓石であり、すべて切り石を使用した基壇の上に造立されている。5は基壇上の本体が倒壊して下向きになっており。僅かに上部の法名と没年が確認できた墓石である。二段の基壇と一段基礎、これに下幅60cm、高さ176cmの尖頂方形型の本体が伴う。墓碑銘は「仁海院殿／天保四年六月」と確認できるのみである。六代之昌の墓石と考える。六代之昌は、米子荒尾分家の三代成真の第二子であり、天明八年に家老職に就き、天保四（一八三三）年に没している。

7は三段の基壇の上に一段の基礎を伴う、下幅58cm、高さ160cmの尖頂方形型式墓標であり、墓碑銘は「大栄院殿故大夫義山良勇大居士／明治五壬申年二月十四日／在世名池田箇翁之貞」であり、八代之貞の墓石である。八代之貞は七代之純の長男であり、天保六年に家老職に就き、明治五（一八七二）年に歿している。

6は三段の基壇の上に一段の基礎を伴う、下幅60cm、高さ174cmの尖頂方形型式墓標である。本体が下向きに倒壊しているために墓碑銘は確認できないが、5・7と同形同大であり、天保八年に歿した七代之純の墓石と想定できる。七代之純は、六代之昌の次男であり、天保六年に家老職に就き、天保八（一八三九）年に江戸において四十八歳で歿している。

8は二段の基壇の上に上部を丸く幅を狭めた一段の基礎を置き、これに幅52cm、高さ154cmの円頂方形型の本体を造立している。墓碑銘は「寶輪院殿昭譽皓日昌清大姉／天保十五甲辰年八月五日」である。六代之昌の内室墓石とも想定できる。

9は二段の基壇の上に上部を丸く幅を狭めた一段の基礎を置き、これに幅52cm、高さ158cmの円頂方形型の本体を造立している。墓碑銘は「保壽院殿昌室慈禎大姉／安政三丙辰年正月十一日」である。七代之純の内室墓石とも考えることができる。

以上二箇寺に分かれて遺存する山城池田家の墓石は、広徳寺では初代之政から五代之政、玄忠寺では六代之昌から明治期の八代之貞の墓石を確認できるが、現状では四代之寿の墓石を確認できない。広徳寺の本体のみ再配置された中に所在するものと思える。

歴代当主の墓石型式は、初代之政の墓石で確立された高さ六尺ほどの尖頂方形型墓石であり、一貫している。これに対して内室墓は、上部の幅を円く狭めた一段の基礎石の上に造立された円頂方形型墓石であり、明確な差異を顕示している。

(8) 【下池田家墓所】

下池田家は、池田輝政の九男利政の第二子である知利が寛永十九年に光仲に召し出されたことにより創始された家門家である。墓所は、鳥府城下を南に外れた曹洞宗の法清寺に営まれている。歴代の墓石は本堂裏の窪地に形成された墓地の中央部に展開しており、最奥部の高所には初代知利の先考利政の供養塔が後代に造立されている。

11は、宝暦十一（一七六一）年に歿した四代利恭の墓石であり、切石を使用した三段の基壇の上に上部が丸く幅を狭める基礎石を置き、幅52匁、高さ160匁の本体を造立した、総高298匁（九尺八寸）規模の円頂方形型墓標である。墓碑銘は「當山中興開基玉雲院殿本府大夫義興浄仁大居士」である。この切石基壇を伴う墓石型式は、以後五・七代に継続している。四代利恭は岡山藩家老日置伊右衛門の子であり、家禄三千石の下池田家で家老職に就き執政となった始めである。

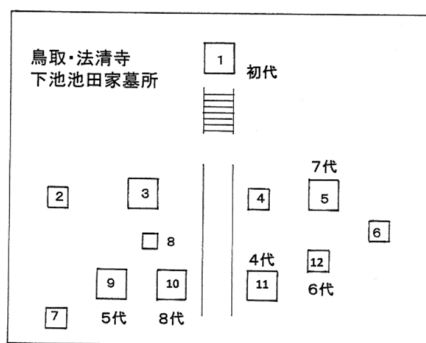
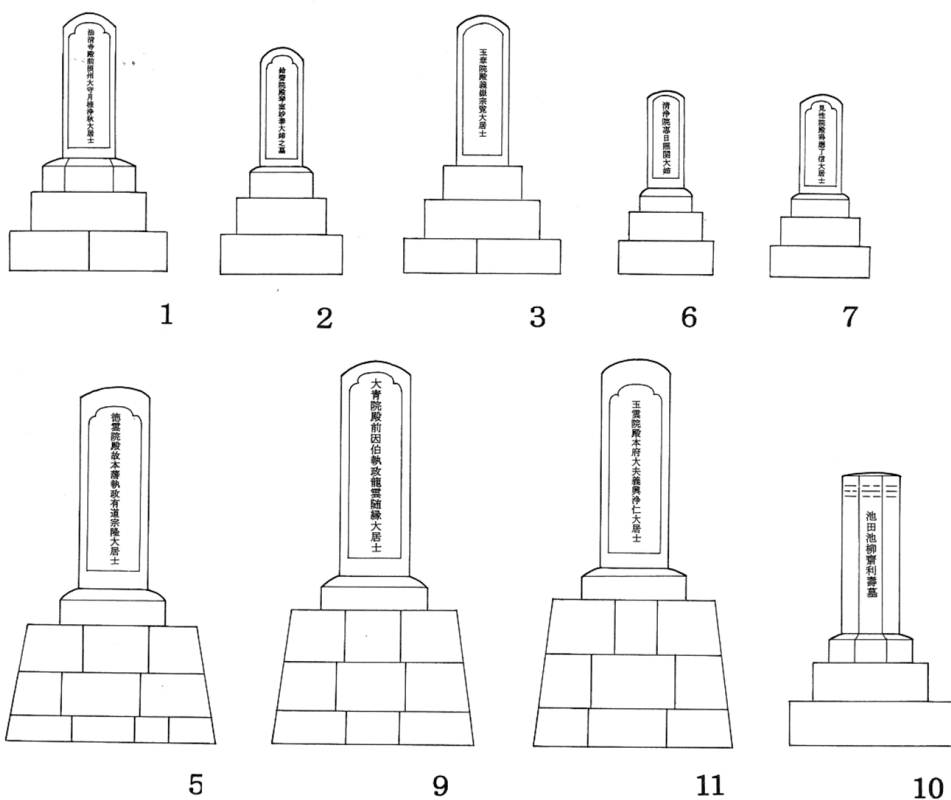
法清寺は、四代利恭が利政の遺言を守って宝暦六（一七五二）年に、備前にあつた利政の位牌を奉じて、もとの利政の領地である逢坂退休寺の末寺として創建した。

9は五代利久の墓石であり、総高294匁を測る。法名は「大青院殿前因伯執政龍雲随縁大居士」である。五代利久は、鳥取二代藩主綱清が弟の清定に二万五千石を分与して立藩した鹿奴藩の二代藩主仲央の第四子であり、宝暦七年に家老職となり、享和三（一八〇三）年に歿した。

5は七代利辰の墓石であり、総高274匁を測る。法名は「徳雲院殿故本藩執政有道宗隆大居士」である。文化元年に五歳で家督を継ぎ、文政八年に家老職に就き、天保二（一八三一）年に歿した。

六代利仲の墓石は、実測・図示してはいないが、墓地中唯一の四代墓石に並置する四尺規模の五輪塔である。院殿号の法名と文化元（一八〇四）年の歿年が刻まれており、五代利久の子で享和三年に家督を継ぎ、江戸出府中に没した六代利仲の墓石と確認できる。他と異なる墓石型式の採用は、供養塔としての造立と判断できる。

10は、明治元（一八六八）年に歿した八代利壽の墓石である。二段の基礎の上の造立された円頂八角柱型の墓石であり、総高210匁



第14図 下池池田家墓石・鳥取法清寺

である。上部の八面には利寿が好んだ易に用いる八卦の図文が刻まれている。墓碑銘は「池田池柳齋利壽墓／在世四十有三 法号池柳院殿樂天利壽居士」である。墓石前には、故人の石製座像が安置されている。八代利寿は天保二年に四歳で家督を継ぎ、嘉永二年に家老職に就いて藩政に活躍し、慶應二年に隠居して池柳齋を名乗った。

1は初代知利の先考である利政の供養塔であり、三段の基礎を伴う総高200厘の円頂方形型墓石である。法名は「法清寺殿前撰州大守月桂淨秋大居士」であり、没年は寛永十六（一六三九）年である。墓所は、備前和意谷の池田家墓所中に儒墓が営まれている。この供養塔は、八代利壽が天保十五（一八四四）年に備前和意谷に造営されていた高祖利政の墓所の霊沙を持ち帰り、これを埋めて造立したものである。

3は天明元（一七八一）年に二十歳で歿した池田刑馬利渡の墓石である。2は没年不明であるが、6は天保五年、7は寛政十年の大姉号の墓石であり、歴代の内室墓と想定される。三段の基礎を伴う円頂方形型墓石として鳥府城下に普遍化している形状であり、歴代当主墓とは明確な差異を顕示している。

四 鳥取藩池田家上級家臣家の墓所

（1）【福田家墓所】

鳥取藩着座家以外で特定の領地を預かって治政を行ったのは、番頭筆頭の家禄三千五百石福田家のみであり、伯耆の山間部の池田家移封以前には関氏が預かった黒坂の地を支配した。墓地は黒坂の町の北側の傾斜地を造成して営まれている。また福田家の鳥府における墓地は、浄土宗一行寺に歴代墓が構えられている。¹⁹⁾

黒坂墓地の案内板には、「地頭 福田家墓地 関氏について池田下總守がしばらく黒坂に在城したが、寛文元（一六六一）年より明治二（一八六九）年に至る二百年余りの間は、鳥取藩主池田氏の家老福田氏が黒坂陣屋にあって治めた。知行は三千五百石であった。福田氏は、平素は鳥取にあり黒坂には城奉行を駐在させたが、因幡二十士が泉龍寺に幽閉された時は、自ら入城して警固の任にあたった。福田家の菩提寺は鳥取の一行寺であるが、左の二世は黒坂を懐かしみ遺言によってここに葬り、光西寺にて弔祭が行なわれている。第四代 福田筑後守久武、第八代 福田丹後守久寧 一段下の墓地には長臣山上半太夫の碑がある。」と示されている。

墓地上段には、ともに花崗岩を用いて造立された四代福田筑後守久武の墓石と、八代福田丹後守久寧の墓石が並置されている。久武の墓石(22)は三段の基礎の墓石上に幅68㎝、高さ212㎝の墓石本体を造立した総高346㎝(一丈一尺四寸)の円頂方柱型墓石である。基礎石の三段目上部は丸く幅を狭め、本体正面は縁を残して内側を彫り窪める一般的なものではない。

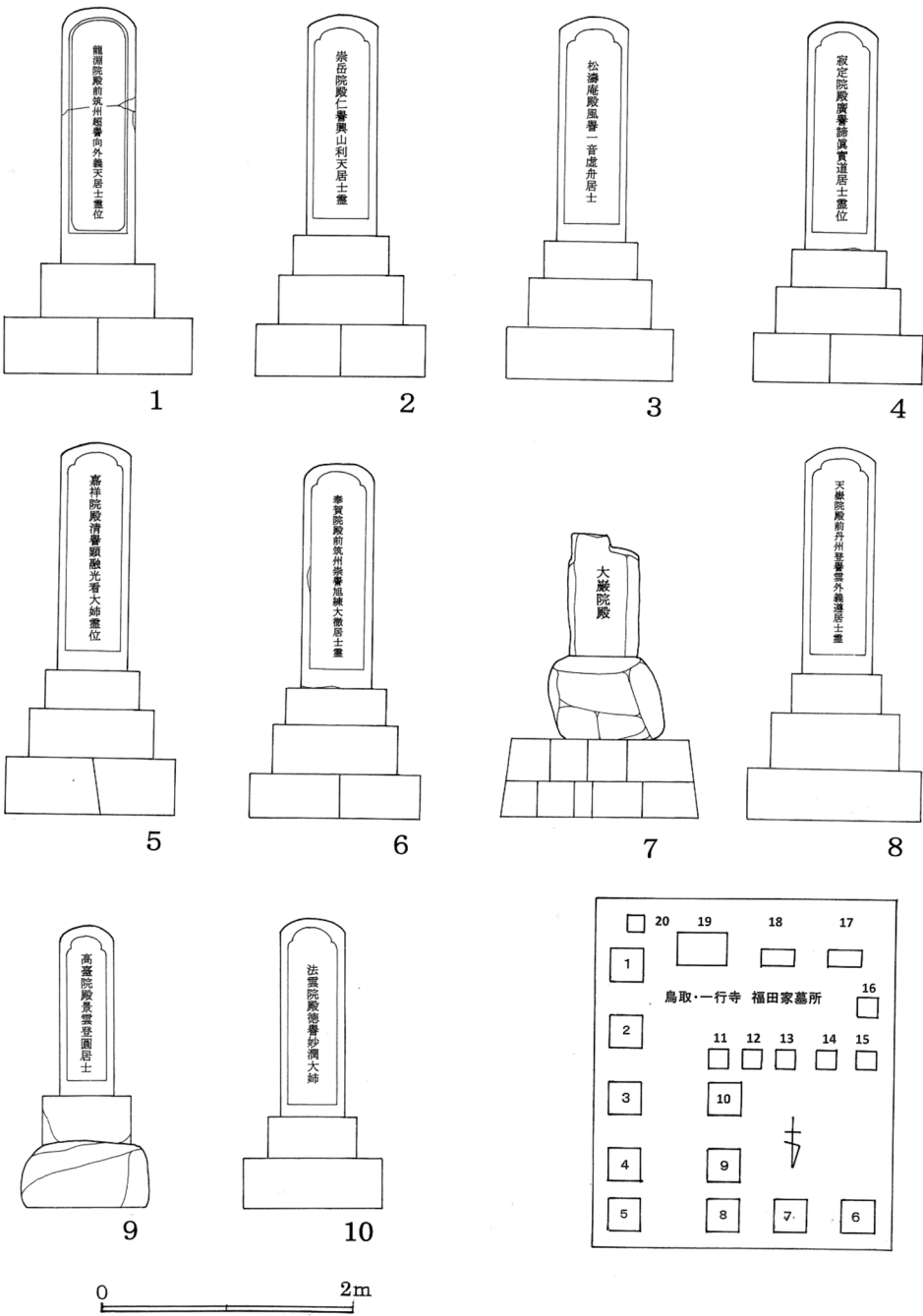
正面には「故騎將兼黒坂縣大夫福田久武府君之碑」と大きく鐫刻し、この左右および三面に以下の墓碑銘を刻んでいる。

「府君姓源氏福田諱久武小字虎之介後字孫之丞襲封称兵部後號筑後世伯州黒坂縣大夫也按家牒其先出水尾帝而桃園之簪纓繼孫王之武弁之後自鎮將滿仲之弟滿政而門業蔓衍支分派離綿々遙胄到左衛門尉景通始爲福田其曾孫牛之介久次初執贄大和重相公後簪仕豊國太閤殿下任卒將慶長五年仕輝政公擢騎將扈從播陽自稱和泉是府君之曾祖父也光仲公就封因伯二州之後寛永九年祖内膳久重始領伯州黒坂爲大夫父兵部久隆襲封嘗聘池田加賀女生子十数人伯仲叔氏並先卒季氏則府君寛永二十年壬未十二月望日誕于因府館遂家嗣其天資溫雅慈良節儉好義修己愛人慎國憲如履氷齊家道如從繩雖山野徜徉日未嘗脫其禮服莫放其言笑少壯好學慕賢哲討論仁義居常恐或違其行凡求儒釋之遊則招呼聽其講說敬接加篤嘗令人楷書一大誠字扁之燕寢經十數枚改書復懸之壁上養其志所素知有其子三男二女伯叔夙卒長女嫁騎將安養寺氏既掩坎次女嫁騎將三浦氏享保丙申壽七十有四罹病雖醫禱萬計不能得其驗到荏苒八月望日泊然逝易實際猶其嚴諄諄猗歎終天悲誰訴何怙生乎不好□鬻氏之教故略□□其實迹之系以銘 府君蓋世 將業不荒 尊崇儒術 欣慕賢良 身守儉素 事精詳処 子教義方 橋梓道絶 蓼莪情長 黒坂山上 白雲淒涼 戊戌享保三年八月五日 孝子騎將黒坂縣大夫福田久品立」

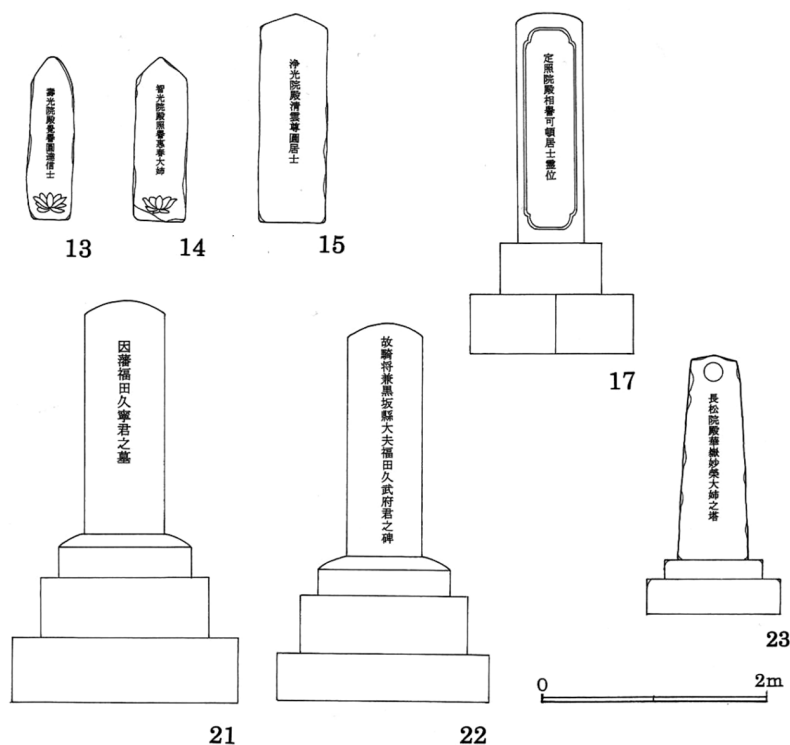
すなわち福田氏は源滿仲の弟滿政の末葉であり、初代福田久次が豊臣秀吉に仕えた後の慶長五(一六〇〇)年に池田輝政に騎將として仕えている。寛永九(一六三二)年に光仲公が因伯二州を治めるにあたって二代久重が始めて伯州黒坂を領し、その子の三代久隆と池田加賀女との間に生まれた四代久武の墓石であり、五代久品の造立である。

八代福田久寧の墓石(21)は総高366㎝の大きさであり、正面には「因藩福田久寧君之墓」と鐫刻している。片側面には「大巖院殿明譽峻徳義翁居士」の法名を刻み、他面には以下の墓碑銘を表している。「君諱久寧通称丹波爲伯之黒坂都主祿三千五百石其先久次世有城之葛野郡越畑初在豊臣大和納言麾下後属豊臣閣下有故辞歸越畑當時諸侯爭求爪牙國清公開久次之英烈召爲先鋒騎將之魁賜四千二百石舜録如在豊公時関原役公有勲勞封受于播久次從焉又以次公子爲錦葉賜備前久次從焉元和己未告老致仕子久重統請分七百石於弟右馬之介後播因易封復備因易封久重從移因爲伯之黒坂都主属邑十八以充折衝任以備境場變嘗有班爵秩議慮門地閥閥有紛紜久重請列卿次班定於是今猶云感忠節至君八世班爵如故君質直勤儉服色爲常不用精不僭不驕人称其恭遜文政元戊寅秋八月十日疾歿反葬黒坂立

鳥取藩池田家における家老墓の様相



第15図 福田家墓石（1）・鳥取一行寺



第16図 福田家墓石（2）・鳥取一行寺など

碑記其概已因藩野崎雍謹誌」

鳥府一行寺の墓地は、本堂裏の境内墓地に営まれている。八間四方ほどに集約されており、20基の墓石を確認できる。三代久隆以降の墓石は安山岩を使用した円頂方形型墓石に統一されており、刻まれた墓碑銘により被供養者を特定できる。

三代久隆の墓石（17）は、二段の基礎の上に造立された総高310糎（一丈）の大きさであり、縁を残し二重に彫り窪めた本体正面には阿弥陀の梵字種子の下に「定照院殿相誓可頓居士靈位」の法名と延宝八庚申（一六八〇）年五月初三日の没年、「福田兵部久隆」の俗名を確認できる。

黒坂に墓石のある四代久武の墓石（1）は、二段の基礎の上に造立された総高300糎の大きさであり、本体上部にひびを確認できる。院殿号の法名に前筑州の受領名を加えており、享保元（一七一六）年の没年、福田氏久武の俗名を確認できる。

五代久品の墓石（6）は、三段の基礎の上に造立された総高290糎の大きさであり、受領名を伴う法名、宝暦四（一七五四）年の没年、福田氏久品の俗名を確認できる。

六代久茂の墓石（8）は、三段の基礎の上に造立された総高306糎の大きさであり、受領名を伴う法名、安永元

(一七七二) 年の没年、福田氏久茂の俗名を確認できる。

七代久命の墓石(2)は、三段の基礎の上に造立された総高²⁹⁴ 294 厘の大きさであり、院殿号の法名、安永五(一七七六)年の没年、前福田内膳久命の俗名を確認できる。

黒坂に墓石を造立した八代久寧の墓石(7)は、変形例である。切石を組み合わせた二段の基壇の上に自然石の基礎と本体を造立しており、総高は²³² 232 厘を測る。正面に「大巖院殿／福田前丹州久寧墓」と表し、側面に文政元(一八一八)年の没年を刻んでいる。

九代久鎮の墓石(3)は、三段の基礎の上に造立された総高²⁹⁴ 294 厘の大きさであり、松濤庵殿の法号と福田丹波久鎮の俗名、天保九(一八三八)年の没年を表している。十代久徴の墓石(4)は、三段の基礎の上に造立された総高²⁹⁴ 294 厘の大きさであり、正面に院殿号の法号、側面に福田伊賀源久徴壽五十八歳と嘉永六(一八五三)年の歿年を刻んでいる。

以上の歴代当主のほかには、5の五代久品義母の墓石は当主墓石と同規模であるが、10の六代久茂女の墓石は小規模である。また9の小規模な墓石は、十六歳で歿した居士の墓石である。

福田家墓地には、以上の定型化した墓石の他に、古い様相を示す自然石の頂部を尖らせた尖頂方形型墓石も造立されている。15は上部に阿弥陀の梵字種子を表した院殿号の法名を有する二代久重の墓石と思える総高¹⁹⁰ 190 厘の墓石であり、延宝二(一六七四)年の歿年を確認できる。14は下端に蓮弁を刻んだ総高¹⁵⁰ 150 cmの院殿大姉号の墓石であり、承応二(一六五三)年の没年を刻んでいる。さらに三代目福田和泉久隆母と表されており、背面には嘉永四年七月月再建と明記されている。

13は高さ¹⁵⁰ 150 厘の、院殿信士號の法号を刻む承応二年の墓石である。初代久次の墓石の可能性が高いものである。これら3基の墓石は、14に示される如くに後代に再建された可能性が高いものであり、黒坂に墓石を造立した四代以降に墓地造営が確定したものとも思える。

一行寺墓地以外に、福田家に関連する墓石が大隣寺墓地中に所在している。安山岩の切石を使用した二段の基礎石の上に造立された尖頂方形墓標であり、総高は²³⁶ 236 厘を測る板石使用の大型の墓石である。正面には「長松院殿華嶽妙榮大姉」の法名と元禄七(一六九四)年の没年に加え、「池田加賀守息女福田兵部久武之慈母享年七十九」と表している。

すなわちこの墓石は、岡山池田家家臣の池田加賀守政虎の息女で福田家三代久隆に嫁した四代久武母の墓石と確認できる。この墓石が一行寺ではなく大隣寺墓地に所在する所以は明確ではないが、鳥取藩家臣に召し出された粟池田田政広の姉妹関係に基因するも

のとも思える。

(2) 【神戸家墓所】

神戸家墓所は、執政鵜飼殿家の墓所が営まれた鳥府の法華宗陣門流の妙要寺に確認することができる。墓地の一隅に列をなして再配置されており、祭祀は絶えている。鳥取藩池田家にあつては家禄百石以上は450家であり、このうち千五百石以上は14家に限定される中で、神戸家は家禄千八百石を誇る。寛永十五（一六三八）年には家臣団増強に従って神戸豊前の弟の惣左衛門が召出されて分家しており、元禄七年組帳には神戸縫殿千八百石の組に神戸又三郎三百石が記載されている。²⁰⁾

一列に配置された墓石は11基であるが、このうち江戸時代の当主墓は中央部に並置された6基である。このうち享保二（一七一七）年の最古の紀年銘を刻むのは、1の方柱型笠付き墓石であり、二段の基礎を含む総高は212糎（七尺）である。正面には法性院殿廓了日通居士と法名、側面に神戸喜内成元の俗名を表している。2は二段の基礎を含む総高204糎の円頂方形型墓石であり、以後はこの墓石型式に統一されている。學性院殿前對州道林日信居士の法名と寛保三（一七四三）年の没年を刻んでおり、さらに八十一歳の行年も表している。

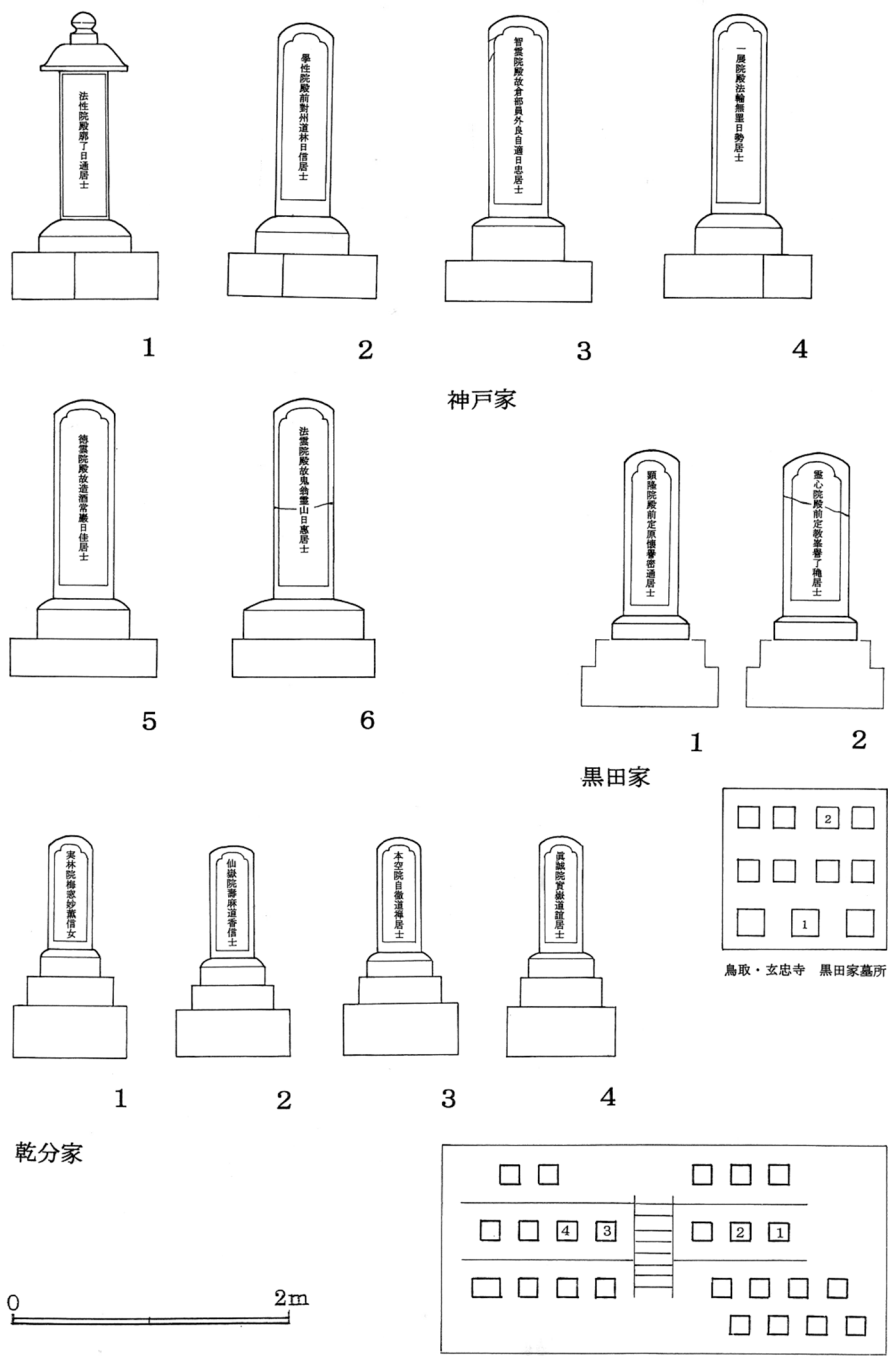
3は同大同形の墓石であり、智雲院殿故倉部員外良自適日忠居士の法名と文化三（一八〇六）年の没年を表している。4も同大同形の墓石であり、一展院殿法輪無量日勢居士の法名と文化十四（一八一七）年の没年に加え、「神戸元誠之胤子一展之廬」と家系を表している。

5の墓石には、徳雲院殿故造酒常巖日佳居士の法名と、文政三（一八二〇）年の没年を刻み、「勢州之庵裔神戸元陳之墳」と表して系譜を明示している。6は中央部にひびが認められる墓石であり、法雲院殿故鬼翁靈山日恵居士の法名と文政八（一八二五）年の没年を表している。

(3) 【黒田家墓所】

黒田家は、元禄七（一六九四）年の組帳では黒田監物が千五百石、慶應三年の組帳では黒田四郎左衛門の千百石の家禄を確認できる。また「藩士列伝」には黒田四郎兵衛を取り上げて、「祖父正綱若州小浜の城主京極氏と同族なるを以て小浜に客たり。後去りて

鳥取藩池田家における家老墓の様相



第17図 神戸家・黒田家・乾分家墓石

輝政公の客分として姫路に在り、正綱死するに及んで其の子出雲を京都より召し、千石を給ひ番頭と為す。忠雄公に従つて岡山に徒る。四郎兵衛の父なり」と勤仕の系譜を確認できる。また黒田四郎兵衛は、弟の村田長兵衛が小浜藩士と争い斬殺された仇討を果たし、忠雄公から称賛され加禄されたことが詳述されている。²¹⁾

黒田家墓所は、上池池田家の後半代に墓地在り、黒田家墓所に造営されている。歴代の墓石は一段の基礎石を残して三列11基が再配置されており、すべて安山岩を使用した円頂方形型墓石である。

正面中央に配置された1は、天保八(一八三七)年の没年を表した、幅40糎、高さ124糎の大きさであり、顕隆院殿前定原懷譽密道居士の法名と黒田兵庫定厚行年五十六歳と俗名行年を表している。2は確認最古の明和九(一七七二)年の没年を示す、幅48糎、高さ122糎の大きさの墓石である。霊心院殿前定教峯譽了庵居士の法名と、黒田主税定政の俗名を表している。上士の墓石としての四尺規模の墓石本体と、院殿号の法名を確認できる。

(4) 【乾分家墓所】

鳥取藩家老乾家の分家の墓所は、藩祖の菩提寺である興禅寺墓地中に営まれている。本堂背後の斜面裾部には乾本家の墓所が造営されており、やや離れた斜面上部に現在祭祀の絶えた墓所を確認することができる。「着座家伝」の乾家の項に、「知長(四代)の弟一学召出されて大寄合に列す」とあり、慶應三年の組帳には五百石の乾英夫(閉門)を確認することができる。

墓所は、幅10米の範囲を三段に造成して造営されており、総数20基以上がある時点で再配置されたものと思える。中央部には階段を付設しており、最下部分には小形の墓石を並置している。

図示したのは、中段に配置された4基であり、最上部を円く幅を狭めた三段の基礎石を伴う円頂方形型墓石である。

1は三段の基礎を伴う総高162糎(五尺三寸)の大きさであり、「実林院梅窓妙薫信女」の法名と天保六(一八三五)年の歿年と「乾七左衛門元長妻 行年七十八才」の墓碑銘を表している。2は同型同大の墓石であり、「仙嶽院壽麻道香信士」の法名と文化十二(一八一五)年の没年と「乾七左衛門元長」の俗名を表している。即ち1と2の墓石は夫婦の墓石であり、法名は院号信士・信女とされている。

3は総高162糎の大きさであり、正面には「本空院自徹道禅居士塔」とし、側面に宝暦十二(一六七二)年の没年と「俗名乾丹下」

を表している。4は同型同大の墓石であり、「眞誠院實嶽道誼居士」と文政三（一八二〇）年の没年、「俗名乾卯三郎朋長 行年四拾三歳」の墓碑銘を表している。

すなわち乾分家の墓石は、本家の墓石が総高290糎（九尺六寸）規模であるのに対し、162糎（五尺三寸）規模と明確な相違を示している。また法名も本家が院殿居士であるのに対し、院居士（信士）と格差を以て使用している。

五 鳥取藩池田家臣墓の様相

以上に因幡・伯耆三十二万石を領した鳥取池田家の家臣墓を、戦国以来の城下町を支配した家老家の墓石を中心として概要を把握した。これによって明確なように、「自分手政治」を任された家老家の墓石は、独自の様相を顕示している。

米子を預かった筆頭家老荒尾但馬守家の墓石は、米子了春寺墓地では一貫して尖頂方柱型墓石を採用しており、筆頭家老家として他家の墓石との区別は明瞭である。

倉吉を支配した荒尾志摩守家と八橋を支配した津田家の墓石は、ともに頂部を平坦ないしは円く整形した板石を使用しているが、幅において津田家墓石が勝っている。

船岡を預かった乾家の墓石は、船岡の墓所と鳥府興禅寺の様相をまとめると基本的には円頂方柱型墓石を採用している。三段の基礎石の最上段の上部を円く幅を狭めこの上部に本体を造立する構造は、鳥取藩家臣墓に通用な墓石型式と確認することができる。

浦留を預かった鶴殿家の墓石は、八代政長の墓石以降は定型化した三段基礎の円頂方形型墓石であるが、三代から七代までの墓石は様相を異にしている。

池田家門の上池池田家の墓石は、切石を組合わせた2～3段の基壇の上に基礎石一段を伴う尖頂方形の表面を平滑にした墓石本体を造立する墓石を一貫して採用している。墓石本体の系譜は、元禄・宝永期まで鳥府の墓石の主体をなして造立された自然石板石使用墓石に求められ、整形して定型化したものである。

一方下池池田家の墓石は、切石を組合わせた2～3段の基壇を伴う点は上池池田家の墓石と共通するものの、円頂方形型の通有型墓石を造立する点で異なっている。

番頭筆頭の福田家は、伯耆山間部の黒坂の地を預かった。鳥府一行寺では三代久隆以降に円頂方形型墓石を継続造立している。2、3段の基礎石の上に本体を造立する点是他例に等しいが、上部を平坦とした基礎石のみを積上げた特徴を確認できる。黒坂の地には四代久武と八代久寧の墓石が造立されており、ともに三段の基礎石の三段目の上部を円く幅を狭める通有型式を採用しており、本体正面は彫り込まず平坦とするのみある。

これらの有力家臣家の墓石は、①・家独自の墓石型式を継続採用する荒尾但馬守家、荒尾志摩守家、津田家、上池池田家と、②・鳥府に定型化した2、3段の基礎を伴う円頂方形型墓石を採用した乾家、後半代の鵜殿家、下池池田家、福田家に二区分することができる。

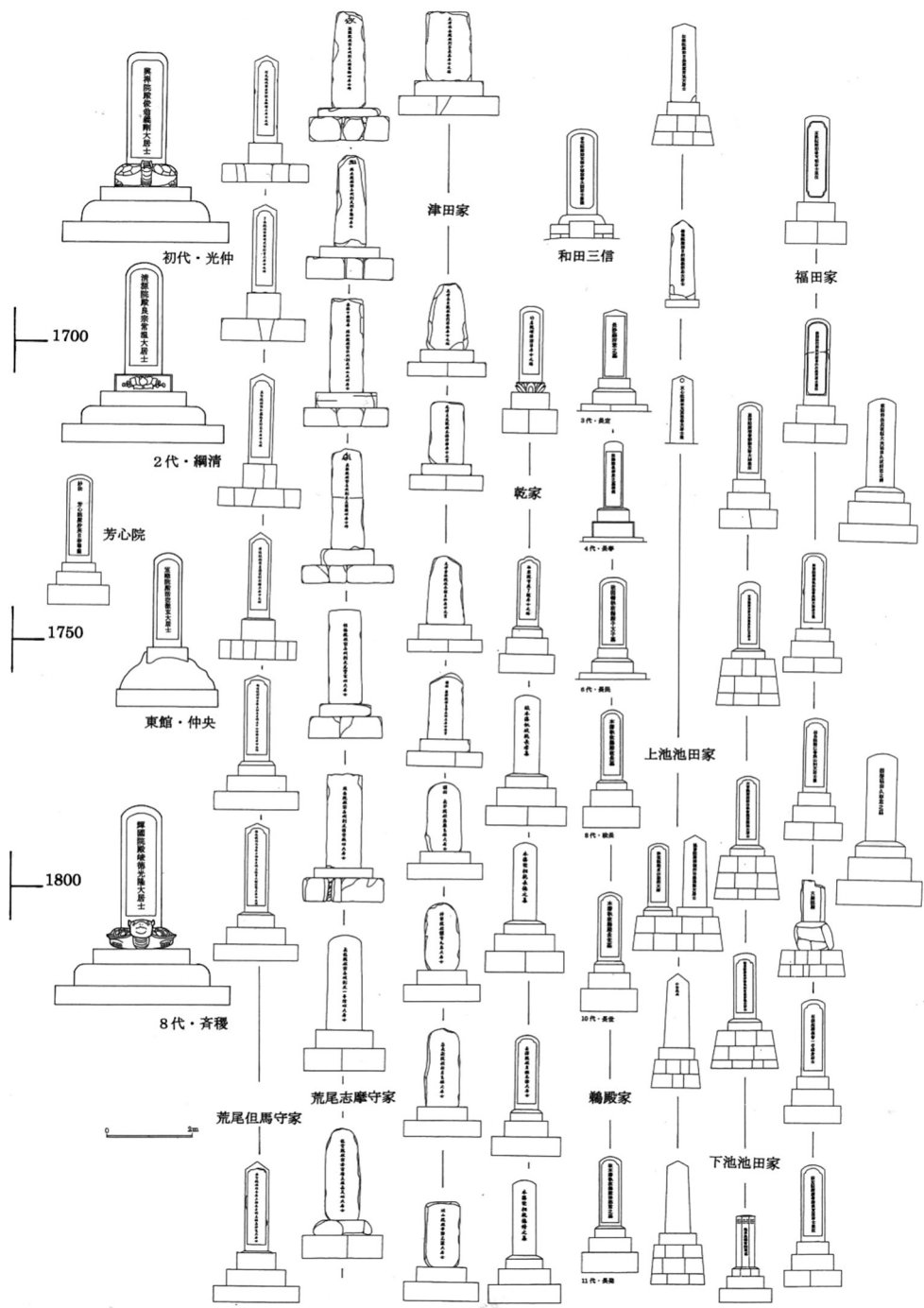
円頂方形型墓石は、歴代藩主および藩主一門の墓石にも採用されており、同一墓石型式を採用する池田家臣団の規制を想起させる。この意味においては②の独自の墓石型式の継続造立が認められた家は、相応の資格の有力家臣家と確認することができる。

藩主池田家の奥谷墓所は、近年現況が調査され国史跡として指定された。墓所には歴代当主墓をはじめ一門の墓石を含む多数の墓石が造立されているものの、実測図が提示された墓石は限定されている。⁽²⁾

鳥取藩初代池田光仲の墓石は、花崗岩を石材として使用した、三段の基礎石の上に亀趺を置き、この上に幅93糎(3尺)、高さ280糎(九尺二寸)、の円頂方形型の本体を造立した総高474糎(一丈五尺六寸)の墓石であり、正面に「興禪院殿故因伯刺史俊翁義剛大居士」の法名を表している。基礎石の最下段の幅は400糎であり、中段の基礎石の上部を円めて幅を狭めている。基礎と亀趺を含めた高さは194糎(六尺四寸)である。この初代光仲の墓石は、以後の墓石を規定している。

光仲は徳川家康の外孫である忠雄の長男であり、母は徳島藩主蜂須賀至鎮の娘の芳春院である。正室は紀州藩主徳川頼宣の長女茶々姫(芳心院)であり、元禄六(一六九三)年に六十四歳で歿し、奥谷の地を墓所として造営して埋葬された。

二代綱清の墓石は、亀趺を伴わずに四段の基礎石を積上げ、この上に幅86糎、高さ272糎の本体を造立した円頂方形型墓石であり、総高432糎(一丈四尺二寸)の大きさである。本体正面に「前因伯両脇太守羽林次将源朝臣／綱清法名清源院殿良宗常温大居士／正徳三年七月四日薨壽六十有五」の墓碑銘を刻み、四段目の基礎正面には蓮弁を表している。二代綱清は、初代光仲の長男であり、母は紀州藩主徳川頼宣の長女茶々姫である。正保四(一六四八)年に江戸の藩邸で生まれ、盛岡藩主南部重信の娘式姫(長源院)を正室とした。



第18図 鳥取藩家老墓の変遷

八代斉稷の墓石は、初代光仲の墓石と同じく三段の基礎石の上に亀趺を置き、この上に墓石本体を造立したものであり、総高481糎（一丈五尺九寸）の大きさである。墓石正面に「耀國院殿峻徳光隆大居士」の法名を刻み、二段目の基礎石上部を円く整形して幅を狭めている。

八代斉稷は、六代治道の次男であり、天明八（一七八八）年に江戸藩邸で生まれ、米沢藩主上杉治広の三女演姫を正室とし、文政十三（一八三〇）年に江戸藩邸で死去し江戸弘福寺に埋葬され、奥谷墓所には遺髪が納められた。

初代光仲の次男仲澄が二万五千石を分知されて立藩した鹿奴藩二代藩主仲央の墓石も、池田家奥谷墓所に造営されている。中段に自然石を配した三段の基礎石の上に幅68糎、高さ227糎の本体を造立した、総高372糎（一丈二尺三寸）の大きさである。本体正面に「岌岌院殿活空徹玄大居士」の法名を刻み、両脇に「宝曆三癸酉年正月十一日薨」の没年を表している。

鳥府芳心寺は、初代光仲の国替えに伴って備前から移転した寺院である。光仲の正室である紀州藩主徳川頼宣の長女茶々姫（芳心院）有縁の日蓮宗寺院であり、宗祖御眞骨を奉安する山陰身延とされる由緒ある寺院である。

芳心院の墓石は、境内墓地の高所の一面に造立されている。三段の基礎石の上に造立された幅60糎、高さ212糎の総高314糎（一丈四寸）の大きさの円頂方形型墓石である。正面には妙法の頭書の下に「芳心院殿妙英日春尊霊」の法名を表し、側面に「宝永五戊子年霜月二十八日」の没年を刻んでいる。

光仲の正室の芳心院は、江戸の郊外荏原郡に所在する日蓮宗大本山の池上本門寺の塔頭である永寿院に埋葬された。墓石は平成二十年に解体修理され、報告書が刊行されている。⁽²³⁾一辺26mで区画した内部に造立された墓石は徳川家に特有の宝塔型式を採用しており、総高は450糎を測る。遺骨は銅製の火葬蔵骨器に納められており、表面には「芳心院源氏者東大神君之令孫紀州前重相頼宣公愛女相州大守少将松平光仲公之尊閼也寶永五戊子十一月日二十八」の墓碑銘が刻まれている。⁽²⁴⁾

これらの藩主および関連墓石を有力家臣墓石と比較すると、その隔絶性は明瞭である。藩主と家臣の関係は墓石に明示されており、封建制を反映する考古資料として位置付けることができる。

鳥取藩家老墓のうち、鶴殿氏関連墓石のうちの三代長定・四代長春・五代長親の墓石は、他例とは異なった特徴を示しており注目することができる。

近世大名家池田一門のうち、岡山藩主池田光政は儒教を信奉し埋葬儀礼も儒葬を実践した。また異教禁止に伴う寺請制度が全国的

に施行された中で、光政治世下の岡山藩では寛文六（一六六六）年から光政卒去後の貞享四（一六八七）年に至る二十年間に「儒道ヲ尊ひ切支丹請ニ神職を立ル下民葬祭之大略」を出して神職請が行われ廃仏が進められた。この結果多くの儒葬墓が造立されており、近世備前地域の特徴となっている。⁽²⁵⁾

これに対して、鳥取藩池田家臣墓における明瞭な儒教葬礼に従った墓石の造立は顕著には確認できない。僅かに浦富奥市山の鵜殿家墓地に確認できる程度である。この墓地形成の端緒は三代・長定の墓石造立であり、尖頂方形型墓標である。正面には、上部を直線的に大きく彫り窪めて「長静藤府君之墓」と鐫刻している。尖頂方形型式の墓標は因幡国内では稀例であり、「〇〇君之墓」とする表記法からは、儒葬儀礼との関連が窺われるところである。更に墓碑銘末尾の「孝子長春」の表記もまた、儒葬儀礼との関連が思われる。

四代・長春の墓石は、正面上部には四行にわたって「故鵜殿／長春君／之墓碑／銘」と表し、下部の窪ませた内部に墓碑銘を刻んだ円頂方形型墓石である。四代・長春の墓石も頂部の形状および題額など、儒葬儀礼との関連が想起される。長春の先妻は、岡山藩主池田光政に仕えた儒者である熊沢蕃山の孫である。儒葬儀礼の関連は、この点からも考えられる。

熊沢蕃山は、幼少期を伯耆米子城下で過ごした陽明学者の大洲藩士であった中江藤樹の門下であり、元和五（一六一九）年に生まれ、寛永十一（一六三四）年に池田光政の小姓役として出仕した。その後、側役を経て三千石の鉄砲組番頭に累進し、光政の補佐役として活躍したが守旧派に批判されて隠棲し、明暦三（一六五七）年には岡山藩を去った。その後京都で私塾を開き活躍したが、貞享四（一六八七）年に著した『大学或問』が幕政を批判したとされて下総古河に蟄居謹慎させられ、元禄四（一六九一）年に七十三歳で逝去し、鮭延寺に葬られた。⁽²⁶⁾

四代・長春の先妻の墓石も円頂方形型墓石であり、正面は上部を直線的として枳を残して全体を彫り窪めて「池田八子孺人之墓」と表している。長春の先妻八子は、池田輝政の四男で元山崎藩主であった輝澄の八男である池田武憲が岡山藩主である池田光政に仕え、儒者である熊沢蕃山の次女厚子を妻として生まれた三女のうちの長女である。元禄六（一六九三）年に、二十三歳で子無くして逝去した。長春が著した『鵜殿家史』の外族譜には「妻之本族、前妻父 池田内膳武憲、初三郎五左衛門、侍従石見守輝澄子、備前侯臣、娶熊澤次郎八伯継、後蕃山了海、女生三女、長女長春嫡室、仲女嫁澤一學自清……季女嫁土肥万吉貞平……」とある。⁽²⁷⁾ 墓石表面に「池田八子孺人之墓」とする表記法は、儒葬儀礼に則ったものである。墓碑銘中には「掩粧於南廓門外第其襲斂之制聊儔儒禮而藁

葬于仁祠遷柩於采邑浦富而塋焉」と確認でき、儒葬儀礼に倣って儀礼を行い、奥市山の墓域に埋葬したことが知れる。

五代・長親の墓石も同じ墓石型式であり、正面彫り込み上端は直線状とする技法を継受しており儒葬墓としての伝統を保持している。

鵜殿家と儒葬儀礼との関連は、他面からも想定できる。二代長之の娘は備前池田家の家老、市場領一万石を治めた土倉一成に嫁ぎ、延宝三（一六九五）年に死して岡山・東山墓地の儒葬墓に埋葬されている。墓は二段の基礎石の上に造立された本体幅36cm、高さ122cmの大きさであり「土倉一成室鵜殿之墓」とするものである。⁽²⁸⁾

この点は四代長春の著した『鵜殿家史』の「外族譜」に「大隅守長之女嫁土倉淡路一成、備前侯光政臣、生二子伯四郎兵衛一長仲清吉早世、一長継家督」と確認できる。

鵜殿家墓石においては、三代長定、四代長春室の葬祭は四代長春が管掌し、儒葬儀礼を採り入れたものと思える。この伝統は四代長春墓石、五代長親墓石にも継受されている。儒葬の影響は鳥府各地の寺院には確認できないものであり、浦富の奥市山という立地も関連するものかと思える。

以上の鵜殿家墓石に看取できるところは、鳥取藩における特異な墓石の様相として注目できるところであるが、宝暦四（一七五四）年に没した六代長民の墓石以降は、二代の折衷型式を介して鳥府に通有な墓石型式へと変遷している。

各地を領した大名家における家老墓は、それぞれの伝統を踏まえた特徴を明示している。ここで近隣の山陰・山陽地方の若干例を瞥見しておきたい。

岡山藩池田家の家老は、池田家門と重臣があたり、領内の主要な地に陣屋を構えて領地を治めた。筆頭家老伊木家は家禄三万三千石で邑久郡虫明に陣屋を構え、家禄三万二千石の天城池田家は児島郡天城を治めた。家禄二万二千石の片桐家は赤坂郡周匝に陣屋を構え、家禄一万五千石の日置家は津高郡金川、家禄一万四千石の森寺家は津高郡武部、家禄一万石の土倉家は磐梨郡佐伯を治めた。

岡山藩主池田家は三代光政が儒教を信奉し、京都の妙心寺にあった初代池田輝政、二代利隆の墓地を改葬し、寛文九（一六六九）年に備前和気郡の地の和意谷敦土山に儒葬墓を造営した。光政もまた没後にこの和意谷墓所に埋葬され、二代利隆兄弟、三代光政兄弟の墓も造営されている。しかし四代綱政は岡山城下に曹源寺を菩提寺として創建し、以後は仏教に従った墓所が営まれた。

各領地に造営された家老墓は、主家池田家の動向に従って儒葬墓を営んでいる。伊木家墓所は虫明の菩提寺興禅寺に隣接する千力

山に造営されている。寛文十二（一六七二）年に歿した三代伊木忠貞の墓は、山頂に墳丘前面に石碑を伴う儒葬墓が営まれており、石碑の形状は和意谷墓所の主家の型式に従っている。

並列して内室と側室の墓が構えられており、延宝八（一六八〇）年に歿した側室は墓誌を伴う儒葬墓であるが、石碑正面には仏教の法名を刻み、元禄十（一六九七）年に歿した内室墓では石碑の頂部が五突起する変形となっている。

千力山墓地においては忠貞没年に近い若干の儒葬墓が造営されているが、四代忠親以後の家老墓は仏式に転化している。

忠貞内室の栄久院は、荒尾成利の女である。荒尾成利は荒尾但馬守（米子荒尾家）二代であり、成房の長子として生まれ、忠継・忠雄・光仲の三公に仕え、明暦元年に六十七歳で没している。さらに、四代忠親の内室も荒尾但馬守家の出身である。

ここに確認できるところは鳥取池田家と岡山池田家の家老家間の姻戚関係であり、養子関係も含め鵜殿家、下池池田家、福田家などにも確認できる。鳥取池田家と岡山池田家は、もとは一体であり長い姻戚関係に基づいたところと考える。

天城池田家は、池田輝政の兄之助の家系であり、初代由之が米子三万二千石を領した後に備前に移り天城を領地とした。鳥取藩家老となった山池池田家の初代之政は、由之の四男である。

天城池田家の墓所は、陣屋に隣接する山上に造営されている。延宝四（一六七六）年に歿した二代由成の墓を儒葬墓として造営し、以後歴代の規範となっている。前面に円頂方形型の石碑を造立し、この背後に埋葬した長方形の区画を確認できるが墳丘は遺つてはいない。

片桐池田家墓所は、領地の茶臼山に造営された。延宝七（一六七九）年に歿した二代長明の墓は、和意谷の主家と同巧の石碑を造立し、この背後に長方形の区画をもって埋葬しているが、墳丘は遺存しない。三代以後の墓石は宝塔を経て笠付方柱型の仏式墓石に転化している。

土倉家では、延宝三年に歿した一成妻鵜殿氏、一成の子一長の前室、継室の墓が儒葬墓として造営されているが、貞享五（一六八八）年に歿した一成墓、元禄十一（一六九八）年に没した一長の墓は仏式である。また日置家墓所には儒葬墓は造営されておらず、法名を著した仏式墓石が造立されている。

藩主池田光政が儒教を信奉し儒葬墓を造営した影響は、特には神職請を行った寛文六（一六六六）年から貞享四（一六八七）年の間には家臣間で顕著であり、盛んに儒葬墓が造営されてきたが、以後の継続は家ごとに異なる。特には統一した墓石型式の採用は確

認することができず、鳥取藩池田家家老墓とは異なった様相を呈示している。

萩藩毛利家家老墓も、独自の様相を示している。藩主毛利家墓所は、奇数代の藩主墓が萩・東光寺、偶数代の藩主墓が大照院に造営されている。東光寺には大形の笠付方柱型墓石、大照院には五輪塔が造立されている。

家老墓としては、毛利元就の七男天野元政の子孫である家禄一万六千石の防府の右田毛利家、元就の五男元秋の子孫である家禄八千三百石の厚狭毛利家、早くに毛利に従った家禄一万二千石の須佐の益田家では中形の五輪塔を採用している。この様相に対し、元就の三男小早川隆景の子孫である家禄一万八百石の山口の吉敷毛利家では、五輪塔と笠付方形型墓石を採用している。また四万石の支藩である徳山毛利家では、大形の笠付方柱型墓石を採用しており、当初六万石で立てられた長府毛利家でも大形の笠付方形型墓石を歴代藩主墓として採用している。以上からは、家臣としての家老墓は基本的には中形の五輪塔の採用であり、笠付方柱型墓石の限定的な存在が確認できる。

石見国の小藩である四万三千石の津和野藩では、近時藩主家の亀井家墓所は国史跡に指定されて整備・保存されている。亀井家墓所では歴代藩主墓は尖頂方柱型墓石の後に、位牌を規範として頂部に独特な造形を施した方柱型墓石が定型化している。これに対して内室墓は頂部を円く三突起させるものであり、明確な形状の差異を明示している。さらには子女の墓石には笠付方柱型墓石を採用しており、家族内における被葬者の違いに従っている。⁽²⁹⁾

津和野藩の家老墓は、藩主家内の差異を基として内室墓の墓石型式を採用しており、亀井分家の当主墓のみが藩主墓石に類似する形状の墓石を採用している。藩主家子女墓に認められる墓石型式は、一般家臣墓石に採用されており、厳格な墓石造立規制を看取できる。⁽³⁰⁾

江戸時代の墓石は、都鄙を問わず生前の身分・階層を反映して造立されており、地域の支配体制を確認する重要な歴史資料となっている。いまやその存続が困難となった多くの墓石の実態を把握し、その意義を究明するのは、現代に生きる研究者の責務といえよう。

本稿を草するにあたり、鳥取県倉吉市在住の立正大学同窓の眞田廣幸氏と森下哲哉氏には種々有益なご教示を賜った。記して感謝申し上げます。

註

- 1 鳥取県『鳥取県史』第三卷 昭和五十四年
- 2 福井淳人「鳥取藩家臣団形成期の諸問題」『鳥取県立博物館研究報告』第二十号 昭和五十八年
- 3 岡山県教育委員会『大岩遺跡』岡山県埋蔵文化財調査報告・128 平成十年
- 4 坂本敬司「鳥取藩家老制度の成立過程」『鳥取藩研究の最前線』平成二十九年
- 5 鳥取県立図書館『鳥取藩史』第六卷・着座列伝 昭和四十六年
- 6 平野仁也「十八世紀における家史編纂」『地方史研究』第六十五巻第五号 平成二十七年
- 7 福井淳人「鳥取藩における家臣団形成期の諸問題」『鳥取県立博物館研究報告』第二十四号 昭和六十二年
- 8 中林 保「近世鳥取藩の城下町」『歴史地理学会紀要』第十九号 昭和五十二年
- 9 米子市史編さん協議会『新修米子市史』第八巻 平成十二年
- 10 久保常晴「鳥八曰」『考古学雑誌』第三十一巻第一号 昭和十六年
- 11 倉吉市史編集委員会『新編倉吉市史』第二巻 平成七年
- 12 東伯町誌編さん委員会『東伯町誌』昭和四十三年
- 13 東郷町誌編さん委員会『東郷町誌』昭和六十二年
- 14 船岡町誌編集委員会『船岡町誌』昭和四十三年
- 15 船岡町『新船岡町誌』平成十四年
- 16 福井淳人「鳥取藩人物誌・20 乾 長孝」『教育時報』第174号 昭和五十八年
- 17 福井淳人「鳥取藩人物誌・20 乾 長孝」『教育時報』第174号 昭和五十八年
- 18 福井淳人「鳥取藩人物誌・17 鶴殿大隅長春」『教育時報』第171号 昭和五十七年
- 19 鳥取市『新修鳥取市史』第二巻 昭和六十三年
- 20 日野町誌編集委員会『日野町誌』昭和四十五年

- 20 鳥取県立図書館『鳥取藩史』第一卷（世家・藩士列伝） 昭和四十四年
- 21 鳥取県立図書館『鳥取藩史』第二卷（職制志・禄制志） 昭和四十四年
- 22 中原 斉「鳥取藩主池田家墓所の調査」『考古学ジャーナル』59号 平成二十二年
- 23 史跡鳥取藩主池田家墓所保存会『史跡鳥取藩主池田家墓所』 平成二十五年
- 24 坂詰秀一編『不変山永寿院 芳心院殿墓所の調査』永寿院 平成二十一年
- 25 池上本門寺霊宝殿『万両塚 芳心院と池上本門寺』平成二十四年
- 26 水野恭一郎「岡山藩神職請制度補考」『鷹陵史学』8 昭和五十七年
- 吾妻重二「池田光政と儒教喪祭儀礼」『東アジア文化交渉研究』平成二十年
- 北脇義友「岡山藩前期における儒葬墓」『岡山地方史研究』129 平成二十五年
- 27 石坂善次郎編『池田光政公伝』昭和七年
- 28 鵜殿長春『鵜殿家史』蒲郡郷土史研究会 昭和五十七年
- 29 北脇義友「岡山藩前期における儒葬墓」『岡山地方史研究』129 平成二十五年
- 池上 悟「津和野藩主亀井家墓所における墓標の様相」『考古学論究』第十八号 平成二十八年
- 30 池上 悟「永明寺墓地における近世墓石の特徴」『永明寺調査報告書』津和野町教育委員会 平成二十九年

（二〇一八年十二月八日受理、二〇一九年二月二十日採択）